
ASASHIN

真鵬 澄也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A S A S H I N

【Nコード】

N 4 4 8 4 D

【作者名】

真鵬 澄也

【あらすじ】

江藤裕希は高校入学と同時に探偵部へ入部する。裕希には2つの顔がある。女子高生とアサシンという顔。暗闇の中で生きてきた彼女。探偵部の人達と過ごすうちに芽生えた想い。その想いに葛藤しながらも受け入れようとしていたときに知った父親の死の原因。その時彼女は…

くはじまりく（前書き）

小説の中には「死」「血」「怪我」等、軽くではありますが出てきます。

苦手な方はご注意ください。

くはじまりく

もう四月だというのに、今日の寒さはいったいどうしたものだろう。

今にも雪が降ってきそうな空。

私、江藤 裕希、十六歳。

やっと中学を卒業して今日から高校一年生だ。

前の晩、一通の手紙が届いた。父からだった。

『親愛なる娘、裕希へ。

高校入学おめでとう。すまないが今年もどうやら帰れそうにありません。おまえにはいつも寂しい思いをさせてすまない。私も早くおまえに会いたい。なるべく早く帰れるようにします。くれぐれも体に気をつけて、高校生になったからといってあまり夜遊びをするんじゃないぞ。

父より』

ーという内容だった。

私の父は一等航海士で船長をしています。だから一年のほとんどが海の上です。家に帰ってくることは早々はありません。でも、こうやって月に一度手紙を送ってくれます。寂しくないと言ったら嘘になりますけど、私としては今の状態のほうが嬉しいのです。父には悪いですけど。

実は私、学生は副業なんです。そうすると、え、じゃあ本業は何？と思います。人には決して言えないことなんです。怪しい仕事じゃないですよもちろん。このことを知っているのは一人しかい

ません、私専属の仲介屋だけ。

私は「カーリー」という別の名を持つ暗殺者なんです…。高校に入ったら、絶対に入ろうとしていた部活がありました。いったいこの部活がある高校を、どれだけ探したか……。

放課後その部活の前に行く。

コンコンッ、っと、ドアを二回叩く。

すると、カチャッとドアを明けて出てきたのは、ものすごい美人の三年生のお姉さんだった。

そのお姉さんは私を見て、

「もしかして、入部希望者？」

と、これまた奇麗な声で言った。

私はちよつと緊張して、

「ハイッ」

と、応えた。

「中へどうぞ」

そういわれて中へ入ってみると、何と私のほかにもいっぱい、入部希望者の一年生がいるではないですか。

男と女、半々くらいかな。そんなに人気があるのかなあと、思っている。

「それやあ」

そう言って話し始めた人を見た瞬間、あたしはわかってしまった、みんなの入部動機が、だってカツコイんだもの、ここの部の人たち、女の先輩は美人だし。

この人達が目的だと、一目瞭然。

まったく、本気で入部したいと思ってるあたしは、どうなるのって感じよ。

「入部動機がどうであれ、入部テストに合格しなければ、入部することはできないからそのつもりで。ちなみに俺は、部長の宮内健悟

だ」

入部テスト……ねえ。

そりゃあ、まっね。すんなり入らせてくれるとは、思ってたなかったけど。

どんなテストだろうと思っていたら、別の先輩がしゃべった。

「そして俺は、副部長の斎北貢だ。テスト内容はデスクワーク担当の水野聖から聞いてくれ」

クス。

この人が一番人気とみた。私の勘だけど。

「代わりの紹介どうもありがとう。テスト内容は、知力・体力・瞬発力の三つだけです。そんなに難しいものじゃないから、地力は暗記・種類判別、体力はマラソン、女子は十キロ、男子は十五キロです。頑張ってください」

それを聞いた瞬間、希望者の一人がおどおどしながら言った。

「すいません、あたしやっぱりやめます」

そう言って、出ていってしまった。

すると、ほかの子達も次々と、僕も私もといって出ていってしまった。

気が付くと、私だけになっていた。

部屋の中は静まり返っている。

沈黙を破ったのは、斉北副部長だった。

そして、沈黙を破った一言が、

「根性ねえな」

だった。

顔のわりに、けっこうキツイ性格とみた。まあ、確かに私もそう思うけど。

次に口を開いたのは美人な先輩、名倉あや子さんだった。

「別にいいじゃないの。いつものことじゃない。あなただって悪い気はしないでしょ、あんな可愛い子達に慕われて」

「まあ…な、でも、好かれるってのも大変だぜ？あや子はどうなん

だ？」

「あたし？ あたしは別に平気よ、だってみんな可愛いじゃない」

「あ、そ」

そう言って、斎北副部長は奥の部屋に行ってしまった。あたしのことなんてすっかり忘れてるみたい。なんか存在を無視されたみたいで、ちよつとムつときた。

でもあたしのことを気付いてくれた先輩がいた。宮内部長と水野先輩だ。

「残ったのは君だけだね、名前は？」

「はい。一年E組 江藤裕希です」

「じゃあ、江藤さん。これからテストやろうと思うけど、大丈夫かな？」

「はい、大丈夫です」

「じゃ、聖。あと頼む」

「オーケー。それじゃあ江藤さん、今から十分後に、体操着に着替えてグラウンドに」

「わかりました。じゃ、失礼します」

教室にはもう誰もいない。

ちようど今、午後三時をまわろうとしている。

こんな時間ではみんな帰ってしまっている、部活に入る人達以外は。

着替えが終わり、教室を出る。そして長い渡り廊下。

この渡り廊下は、三つの名前をもっている。

それは昼と夜、昼の時は「キューピット・ロード」これは、お昼休みになるとカップルが多くなることから、つけられたのだそうです。そして、夜の名は「オレンジ・ロード」夕方になるとこの渡り廊下全部が、夕陽で染まることからつけられたそうです。

たしかに、夕陽に染まったこの廊下はすごく綺麗だ。

グラウンドには、水野先輩だけがいた。

「じゃ、始めるよ。タイムとの勝負だからね」
ピストルを構える。

「よい…」

水野先輩のかけ声がかかり、
パーンというピストルの音とともに、私は走り出した。

十キロならまだ平気だ、なぜなら、体力がなければあの仕事は、
やってられない。

それで、二十六分で難なくクリアー。楽勝だね。

そして次の暗記と判別。これもできなければ、勤まりません。
最後は瞬発力。

これはそんなに必要じゃないけど、ちょっとでいいかな程度。
ーで。無事に約一時間で終わってしまった。

それで、全然バテていない私を見た水野先輩は、ビックリしていた。
(フフン)

「江藤さん、すごいね君。特にマラソン、陸上やってたの？ 中学
時代」

「いいえなにも」

言えるわけがない、本当のことなんて。
絶対に。

「結果は今日の夜にでも電話するよ」
「はい」

それで私は、家の電話番号を書いたメモを渡した。
大丈夫だよ、今日は仕事入れないように寺島さんに言っ
し。いた

「じゃあ、気をつけて帰ってね」

「ハイ、さようなら」

教室に戻り制服に着替えて、そして家に着いたのが午後五時。

プハーツ！

お風呂上がりにはやっぱり、麦茶に限るわ。麦茶の一気飲み！
ほんとは、ビールのほうがいいんだけどね、まだ私は未成年だからおあずけてわけ。まあ飲んじゃうときもある、すごく嫌なことがあったときなんかね。やっぱり、こういう仕事をしているとね、いろいろあるのよ。

ピロロロッ

明日の支度をしていると、電話が鳴った。

「はい。江藤です」

宮内部長からだった。

「江藤さん、おめでとう、合格だよ」

「本当ですかっ」

「ああ、明日から正式部員だ。じゃ、明日放課後、部室で待ってるよ」

そう言って、宮内部長は電話を切った。

しばらくの沈黙。

「…やった」

ポツリと呟く…。

ヤッター！ 心の中で叫ぶ。

正式部員だっ。

とと、嬉しさのあまり、コップを落としそうになってしまった。
アブナイアブナイ。

まだ、何の部に入るか言ってませんでしたけど、明日から私は、探偵部員です。

第1話・初仕事・

タツタツタツタツ、タツタツタツタツ。

うひー、完璧に遅刻だあ。

よりによつて今日日直と掃除当番なんだもんなあ、参った。

でも大変かな、仕事と両立するのは、けど、ずっと入りたかったし。

寺島さんに言ったら、怒られるだろうな。なにせ、私たち暗殺者にとつて、探偵・警察は敵にあたるからね。

「裕希さん」

ふと、誰かに呼ばれる。

立ち止まって振り返ってみると、名倉先輩が、教室から出てくるところだった。

「一緒に行きましょう」

私と先輩は、一緒に部室に向かった。

このときでも先輩は、やっぱり注目の的だった。

ゆっくり歩いている先輩に、

「急がなくていいんですか？」

と、尋ねる。

「あや子でいいわよ。うちは、その日その日の部員の予定を全て、コンピュータに入力されているから大丈夫。心配しないで」

と言つて、ニツコリ笑った。

ウーン、まぶしい。

「へえ、すごいですねえ」

ほんとスゴイ。

まさかここまできっちりしているなんて、私の目に、狂いはなかったわ。

と、裕希はニツと笑つ。

コンコンッ。

カチャ。

「こんにちはー」

うー、なんかキンチョー。

ほんとに部員なんだなあ。

でも…あれ？ 部長と水野先輩がいない？

部室の中には斎北先輩しかいない。

「やあ、裕希ちゃん。待ってたよ。合格おめでとう」

「あ、ハイ。ありがとうございます」

「依頼人来てるの？」

あや子さんが言った。

何か意味があるのだろうか、部長達がいらないのと。

「ああ」

「依頼人が来たときは、健吾と聖が依頼依頼内容を聞くのよ」

へえ…。

依頼人で、どんな人だろう。

と、隣の部屋から、部長と水野先輩が出てきた。そして、依頼人

らしき人も。

「それでは、結果が出るのに一週間かかるので、結果が出しだい、

こちらから連絡します」

「健悟、あの子」

依頼人の人が出ていったあと、あや子さんが、ちょっと困惑した顔で言った。

「ああ、伊藤の彼女だった子だ」

「たしか…、近藤ふじみって子だろ、いったい今更何の依頼なんだ？」

伊藤？ いったいどういう：

それでさっきの女の人が、その人の彼女だったわけで、何で過去形なだろう。

その答えはすぐに解けた。

「裕希ちゃん、一カ月前、うちの学校であつた事件って、知ってる？」

宮内部長が言った。

「一カ月前：ですか…」

一カ月前、ねえ：。

そうだなあ、仕事がいっぱい入ってたときだったなあ、あんまりつていうよりほとんど、新聞・テレビとかって観てなかったからなあ、んーっ、この学校で…

「…あつ、たしか自殺したっていう…あれですか？」

そう、一カ月前この学校で、飛び降り自殺があつたんです。正確に言つと、この学校の生徒がビルの屋上から飛び降りたというのが本当なんですけどね。

自殺をした理由はハッキリとわからないんだそうです。でも、屋上に遺書らしきものが靴と一緒に置いてあつたことから、自殺と判断されたそうです。

「そう、それなんだ」

「でも、いったいそれと何の関係があるの？健吾」

うん、私も知りたい。

「依頼内容がそれなんだ」

「どういうことだ？」

宮内は、水野先輩に合図を送った。

「実は彼女、ずっとこのことに関して、納得がいかなかったんだそう。それで悩んだすえ依頼をしに来たらしい。内容は、本当に自殺かどうか調べてほしいとのことだ」

水野先輩はパソコンに向かい、何やら資料を呼び出した。

出てきたデータは、どうやらさつき出てきた伊藤という人らしい。

「この人がそうなんですか？」

「そう、当時二年だった、伊藤勝」

…もしかして

「もしかして、全校生徒のデータが全部、この中に入ってるんですか？」

「もちろん入ってるよ、あと、ここら辺の高校のデータもね」
ハハッ。

参ったね・・徹底しすぎだねこりゃ。

「でも、調べるとしてもこれじゃ、詳しい事がわかりませんよね」
え」

と、私が言うのと。

「その通り、しかも俺達の頭の中では、自殺となっているから、まずその考えを消して取りかからなければならぬ。それから、もう一度彼女に詳しいことを聞く、伊藤は生前何か言っていたかを、まずそこから始めよう」

「じゃあ、彼女を呼んでくるわ」

部長と近藤先輩は、隣の部屋にいる。

私達は、モニターで二人の会話を聞いている。水野先輩は聞きながら、内容をパソコンに入力している。

「だいたい、この部のシステムはわかった。

「ちよっとお聞きしますが、彼が亡くなる前に、何か言っていましたか？　どんなことでもいいですから」

「……」

近藤先輩は、下を向き考えている。

そして、どうやら何か思い出したようだ。

「……たしか、亡くなる二日前です、その日は何だかいつもと違った様子で、ちよっと顔が青ざめていました。そして彼、こう言ったんです。『大変なことに……親父を止めることが、できないかもしれない。俺は……、大変なことを知ってしまったんだ』と、……彼はそれ以上、何も言いませんでした。私は何が何だかわからなくて、次の日彼休んだんです。そして……翌日……」

近藤先輩は、ポロポロと涙を流している。

かわいそうに、どうやら思い出してしまったようだ。

「辛いことを思い出させてしまいました。ですが、これも彼のためです。ご協力感謝します。また、お聞きすることがあるかもしれません、でわ、ありがとうございます」

力チャ。

近藤先輩が出てきた。

「でわ、結果をお待ち下さい」

「失礼しました」

そう言つて、近藤先輩は出ていった。

「聖、入力終わったか？」

「ああ、できてますよ」

ずっと打ちっぱなしだったもんね、水野先輩。

「しかし、どういうことだろうなあ、さっきの伊藤の言葉」

本当に……。何か含みのある言葉よね。

「父親に何か、関係ありそうですね」

「そうね、あの話からするとそうなるわね」

「よし、まずはそのあたりから調べてみるか」

部長が、引き出しから何やら取り出して言った。それは、伊藤勝の住所だった。

「チームを作ろう。伊藤の家に行く班、図書館に行く班、ここは一人だな、あとは、伊藤の身边調査の班だ」

うーん、家のほうに興味があるなあ、でもここはやっぱり、一人で行動できる図書館にしとくかないつベルが鳴るわからないし。

よしっ。

「あの、あたし図書館に行きます」

「…そうだな、図書館のほうが安全だしな、いいよ。じゃあ、決まりだな、俺と聖は伊藤の家、貢とあや子は調査、明日の休日使う、オーケー？」

「了解」

全員意義なし。

ピーピーピーッ。

午前五時、部屋に響き渡るポケットベルの音。そう、これは仕事の依頼だ。そういえば、まだ一つ残っていた。たしか三日前にきた依頼だったはずだ。どうせ早く片付けろというんだろ、まったく。テーブルの上にあるポケットベルを取る。

やっぱりベルには、『はやく済ませろ、期限は今日までだぞ』と入っていた。

裕希は、ため息をつきながら起きあがる。

「それじゃあ、さっさと片づけて、部活の仕事にかからなきゃな」
仕事用の服に着替える。

服は、紺色の黒のストライプのパンツ、上は白のハイネックのトレーナーに、下と同じ紺のジャケット、そして、レイバンに革手袋。今回の射程距離はそんな遠くない、愛用のリボルバーで十分だ。

午前六時半過ぎ。

ターゲットはまだ眠っている。

私は、一つ挟んだ空き家にいる。

周辺の家に人がいないことは調査済みだ。そして、空地が多いかも、銃声は気にすることはない。消音銃で音が出ないように消している。

この仕事をしていて思うことがある。

スコープからターゲットを見る、引き金を引く瞬間まではこの人が生きるも死ぬも私次第なんだと、でもそう思うのも一瞬だけ。

引き金を引く…。

「…さようなら…」

一つの仕事に、そう時間はかからない。

「さて…、図書館に行こうかな」

銃はばれないようにケースに入れ、ショルダーバックの中に。

そうそう、寺島さんに報告しておかなければね、クスクス。

「遅いって、文句言われそうだな」

まあ、いっか。

クスクス笑いながら、図書館へ向かう。

七時を少しまわった頃。

図書館に着く。

電話、電話つと……。

「あ、あつたあつた」

寺島さんの店にかける。

寺島さんは、「HELP」というクラブのマスターをしています。

仲介屋は、副業といったところですか。よく私も飲みに行きます。

学校には内緒ね。

プルルルル、プルルルル！

ガチャツ。

「ハイ、クラブ・ヘルプです」

相変わらず、いい声してるなあ。

「お店繁盛してる？ 相変わらずいい声してるね」

「おかげさまで。貴方もお変わりないご様子で。どうやら、済んだようですね」

と、ため息まじりの声で寺島が言った。

クク、思った通り。

「ええ。終わったわ」

「まったく、貴方の悪い癖ですよ」

「はいはいわかっております」

「ところで」

ん、いきなり口調が変わった。

…仕事かな。

「…仕事？」

「違います。仕事もそうですが」

間髪いれずそう言った。

な、何だろう。

「じゃ…、なに？」

と、ちよつと恐る恐る聞いてしまった。情けない…。

このときは、自分が探偵部に入っていることなど、すっかり忘れていた。

寺島に言われるまで。

「高校生活は、楽しいですか？」

「あ…。バレちゃったのね」

相変わらず情報早いんだから。

まっ、バレちゃしょうがないけど、でも…なぜ私の行動がわかるんだ？

…まさかな…。

「まったく、いったいどういうつもりなんです。バレでもしたら」ムッ。

「大丈夫よ。そんなへまはしないわ」

「心配はしていませんよ、貴女を信じていますから」

あら。初めて聞いたわ。

「それにね、この部はすごいわよ、いろんな機器がそろってて、あの意味利用できるわ」

そう、いざというとき、使わせてもらうわ。

「くれぐれも気をつけて下さい。仕事のほうは、後ほど連絡入れます」

「うん、わかったわ」

電話を切った。

フッ…。

私は、電話を切り言った。

「変わってるね、暗殺者を心配するなんて」

仲介屋が暗殺者を心配することはありえないのだ。ほとんどの暗殺者は組織に入っている、仲介屋も属していることが多い。私は、

どの組織にも入っていない、理由は一言で言えば面倒だし、何より、組織のやり方が嫌いだからだ。まだほかにもあるが。

暗殺者が死んでも仲介屋は困ることはない。組織に属していればすぐにほかの暗殺者があてがわれることになっているからだ。

まあ、組織の中にも、ましな者もいるが。

寺島は私専属の仲介者だけど・・

組織の人間だ。

と、私も変わったか、仲介屋とこんな風に会話をするなんて、以前の私だったら…。どうかしてるな。

「……さて…、調べますか」

午前九時過ぎ

宮内と水野は伊藤勝の家の前にいる。

「父親、いるだろうな？ 聖」

「確かですよ、ここ最近、家にいないことが多かったようですが、ちゃんと連絡を入れておいたから」

「さすが」

と言いながら、インターホンを押す。

しばらくして、父親、伊藤周蔵が出てきた。

二人を見て。

「息子の先輩の方だね」

と言った。

「はい。突然お伺いして申しわけありません」

父親は、門を開けて

「お茶でも出そう」

そう言って、二人を招いた。

カチャカチャ。

「…どうぞ」

コーヒーを置いた。

「いただきます」

父親は、ソファ―に腰かけると話し始めた。

「そうだな……。何を話そうか、まさかこんなことになるなんて、思っても見なかったからな。……勝は、私が言うのも何ですが、本当にいい子でした。正直者で、自分のことのように考え込むんですよ、何にでも。まあ母親を早くに亡くしてますから、その影響もあるんでしょうけど……」

目線は下を向いている。

二人は、顔を合わせる。

「彼女がいたことはご存じでしたか？」

水野が尋ねる。

一瞬、ほんの一瞬、父親の表情が変わったことに、二人は気付かなかった。その表情は、殺意を含んだ、冷酷なものだった。

「彼女……。いや、知りませんでした。そうですか、彼女がいたんですか、名前は何というんですか？ その子には、悲しい思いをさせてしまいましたね」

父親は額に手をあて、うつむいてしまった。

宮内と水野は、顔を見合わせ言った。

「おじさん、僕たちこれで失礼させていただきます。ごちそうさまでした」

二人は席を立った。

父親は顔を上げて、

「そうかい」

玄関に立った二人に、申しわけなさそうに言った。

「せっかく来てくれたのに、何のお構いもできなくて、すまなかったね。今日はありがとう」

二人は、そんなことはありませんといって、伊藤の家をあとにした。

二人は、図書館に向かいながら話している。

「健悟、彼女の名前言わなかったね、どうしてだ？」

水野は、一つの疑問を宮内になげかけた。

宮内は少し黙って、

「聖と同じことさ、もし彼女の言っていることが本当なら、あの父親は俺たちの前で芝居をしていたことになる、そして、彼女の名前を出してしまつたら……、彼女が危ない、そう思ったからだ。あくまでこれは推測だけだな」

もし俺の考えが当たっていたら……、最悪だなと思う、宮内だった。水野はニツと笑って、

「さすがです。さつ、裕希ちゃんのところへ急ぎましょう」
「そうだな」

「すいません、パソコンお借りします」

図書館の最上階にある、コンピュータルームにいる。

ふだんここに入れるのは、許可証をもった人のみが入室できる部屋です。私は、もう常連とまではいかないけど使わせてもらっています。許可証をちゃんと見せてね。

「今日は誰もいないので集中できますよ」

受付のお兄さんが、ニツコリ笑って言った。

私はいつもの場所に座る。そこは端っこで、しかも、入口から見えないのでやりやすい。まあ、だいたいみんな席が決まっている。

カチャカチャ……

パソコンに向かい、資料を呼び出す。

「んーと、まずは、伊藤勝の母親について調べますか」
ピッ、ピピッ。

『伊藤加奈子、東京生まれ。二十二歳のとき、伊藤周蔵と結婚。一年後、長男・勝を出産。十年たった後、夫とおり合いが悪く離婚。自殺を図り死亡』か。

「……」

これだけではわからないな。

……何かが変だ…。

たった十歳の子供を残して自殺なんてするだろうか。いきなり自殺するなんてありえないし、きっと何かがあった。伊藤加奈子は、夫の何かを知っていたんだろうか、それで口論になり……。

「……ちよつと飛びすぎか」

まっ、そんなにはハズレていないだろう。何にしても、伊藤周蔵を調べないことには、解決しないか。知っている人は、もういないわけだから。

そうなる…。

「ブラックリストしかないな、ちよつと危険だけど。B・Bブラックボックスよりは、簡単だけどね」

B・Bとは、リストの裏の情報が入っているのだ。でも…そこまでする必要はない…か。

所詮、ただの学生のすること。詳しく知る必要はないか。

まあ、伊藤周蔵を殺してほしいという、暗殺の依頼があったなら別だけど。

ピピーツ。

画面に、受付のお兄さんからの連絡が入ってきた。
『お仕事中失礼いたします。お知り合いの方が、お待ちしておりますます』

どうやら、先輩たちが来たらしい。

「何かわかったかな」

受付のお兄さんに、お礼を言って下に降りた。

「健悟、聖。早かったわね」

あや子たちが奥のほうから出てきた。

「ご苦労さま。何かわかったか」

あや子が空振りを振る。

「だめね、全然だわ」

「そうか」

「宮、そっちのほうはどうなんだ？」

「ぼちぼちってどこか」

「お前たち二人の考えはどうなんだ」

宮内は少し間をおいて、

「最悪の考えだな。ただ、伊藤が父親の何を知っていたのかがわからない。ヤバイ事なのは確かだがな」

「思ったより、複雑みたいね」

あや子がため息をつく。

そんな四人の話しのやり取りを、裕希は柵の陰から聞いている。

「……」

ふむ。先輩たちも同じ考えなのか…。

ほんとに、伊藤勝は何を知ったんだ…。

「ところで、裕希ちゃんはどうしたの？」

「ああ、今呼び出してもらってる」

「あつ、来ましたよ」

「すいません。お待たせしました」

あたかも、急いで来たかのようにする。

もちろん、コンピュータルームにいたことは内緒だ。そのことは、受付の人たちも知っている。

「何かわかったかい？」

部長に聞かれて、母親のことを話す。

「母親は、六年前に亡くなっていたということだけで、あとはわかりませんでした」

「亡くなった原因はわかる？」

裕希は少しためらい、自殺だと言った。自殺した理由は言わなかった。言わないほうがいいと思ったからだ。これは、この人たちに言うてはいけないうと、そう直観したか。

言ってしまったらきつと、この人たちは調べてしまっただろう、何もかも、たとえ依頼人に全てを話さなくとも。

「…自殺か…」

みんなそれぞれ考えこむ。

宮内が口を開く。

「仕方がないな、俺たちではこの辺が限度だろう。きつとこれから先は、俺たちでは手にあまるだろうからな。第一、もしわかったとしても」

「彼女には言えないわね」

あやさんが言った。

「そうだね」

水野さんがそう言い、斎北さんも頷く。

そして、私は…？。

「謎は謎のまま、知らないほうがいいこともある。残念だが彼女には自殺と」

「待って下さい」

宮内の言葉を、裕希が遮った。

みんなの視線が、裕希に向けられる。

自分でも驚いている。とっさに出た言葉、でも、このまま終わってまう、彼女が真実を知らぬまま終わってしまうことが、何だか、スツキリしなくて嫌だと思った。

「…どうしたの？」

あや子が聞いた。

「…もう少し、もう少し依頼人に言うのは待って下さい」

みんな『えっ？』という顔をしている。

「…えと、あの…。知人にルポライターがいるので、その人に頼もうかと。このままでは、スツキリしなくて…」

みんな黙っている。

自分でも何言ってるのかわからない…。だいいちそんな知人はいない。

「…いいよ」

え？。

「ただし、期限内に新聞に載らなかった場合、依頼人にはさっきの

通り報告するからね。いい？」

「はい。ありがとうございます」

ほんとに、調べ上げなきゃなくなってしまうたな、こりゃ。

第2話・裏切り・

午後十時・自宅

今までのことをまとめる。

伊藤勝が十才のとき、母親が自殺をする。原因は不明、夫との不仲によるものとなっているが、定かではない。

六年後、今度は息子が自殺。自殺をする二日前に、彼は気になる言葉を残している。しかし、父親の何を知ったのかはわからない。

やはり…父親か。

全ての鍵を握るのは、父親にある。

「どう考えてみても、…だな」

寺島からの連絡がないので、寝ることにした。

早朝、授業が始まる前に、宮内部長のところへ頼み事をしに行く。
「どうした？」

出入口では邪魔になるので、窓側によって話している。

「お願いしたいことがあるんです」

「うん。何？」

「伊藤勝の家に行きたいんです。彼女として」

「…彼女として？」

「はい」

宮内は少し険しい顔をしている。当たり前だ。それがどれだけ危険かわかっているからだ。

裕希も、そんなことは百も承知だ。

宮内は、裕希が本気だとわかり、険しい顔のまま

「わかった。ただし、俺も一緒に行く、一人ではダメだ、わかった？」

「はい。ありがとうございます部長」

「じゃあ、放課後部室でな」

宮内は裕希の頭をポンポンと叩いて、教室に戻っていった。

授業中ベルが入る。仕事の依頼だ。

どんな依頼かは、直接仲介者のところに取りに行く。そこで確かめて、受けるか否かを決める。

放課後、宮内が今朝の事を皆に話す。

さすがに、最初は皆反対したが、宮内と一緒にいうことで納得した。

「それと裕希ちゃん、明日は用事があるから明後日でいいかな？」

「はい、構いません。何時にしますか？」

私もそのほうが都合がいい。

仕事が入ってなければ別にいいんだけど。

「そうだな、昼の十一時に『HELP』でどお？」

「えっ」

なに・・・。

「ヘルプって店、知ってるよね」

「…はい、知ってます」

「お昼食べてから行こう」

「割引がきくもんな、そこでバイトしてるんだぜ、裕希ちゃん」

バイト？

斎北先輩はたしかにそう言った。

なんてこと、あ…、でも昼と夜どっちだろう。

「…昼のほうですか？」

「いや、夜のほう。時給いいからね」

ガンッ

よく今まで会わなかったな。いくら変装していてもすぐわかったやうしな、今度から絶対にサングラスは外せない。

まいったな。

今度、寺島さんに言っとなきゃな。

「裕希ちゃん、健悟が女の子に食事おごるのなんて、ないのよー、ねえ、健悟」

あや子さんがからかう。

「人による」

宮内部長はそれしか答えない。

斎北先輩と水野先輩は、ニヤニヤしている。

「良かったわね、裕希ちゃん」

と、あや子さんがニツコリして言った。

「ハア…」

気に入ってもらえたのは嬉しいけど、なんだかなあ…。ハハッ
心の中で、苦笑いする裕希だった。

「ほんとにまいったわ」

依頼を確認するために、寺島の店にいる。もちろん、サングラスはしている。

例のことを話した。

「貴方はもちろん知っていたのよね、マスターだもの」

「はい」

寺島は言いながら裕希の前にカクテルを置いた。

「ありがとう」

「先程のお話ですが、貴女とは鉢合わせしないようにしてみます」

「ごめん、ありがとう」

「これが、今回の頼黒書です」

頼黒書とは、いわゆる依頼書のこと。我々の間ではそう呼ばれている。

依頼内容と、ターゲットの調査書を読む。

依頼主は…、伊藤勝だった。ターゲットは父、伊藤周蔵。理由は

書いてなかった。ただ『父を殺して下さい』とだけだった。

理由は言いたくない…か。

本来ならば、理由がはっきりしない類のものは受けないのだが、今回特別だ。

伊藤周蔵に関する調査結果は、黒と出た『九年前に麻薬取締法違反によって逮捕、三年後に出所。だがその後も密輸など、以前より派手になる。しかし、そのことは警察は知らない。それだけ手口が巧妙になっている。』

水島加奈子と結婚。息子、勝が生まれる。

勝が九才の時、加奈子は伊藤のやっていることを知ってしまう。問いただが、伊藤はやっていないと言うが決定的証拠を見付けてしまう。勝十才の時、可奈子は殺される。自殺したかのように。後、息子を育てる。勝十六才のときに母親同様、父親の秘密を知ってしまう、今年三月十日、某ビルにて、母親と同じく殺される『

……』

やっぱり…、考えていた通りだけど、先輩達が手を引くことにして良かったな。

カクテルを一口飲む。

「…この依頼受けるわ」

「では、四日以内に済ませて下さい」

四日か…。

なんとかなるな。

「わかったわ」

一気にカクテルを飲み干し、頼黒書を持って席を立つ。

…今日の寺島さん、いつもと様子が違ってたなあ。やけに無口だったし、どうしたんだろう。

などと思いながらアジトに行く。

アジトとは…まあ、依頼を受けて終わるまでの間は家には戻らず、暗殺者「カーリー」として住んでいるところです。この場所は、寺島さんも知りません。電話番号だけは教えてありますけど。アジト

は、マンションの最上階にあります。

アジトから学校に行く、本来なら学校は休むのだが、事情が事情なだけに行く。

今日は、部活がないので図書館へ行く。一つだけ調べておきたいことがあった。

コンピュータルーム。

ブラック・ボックス

気付かれぬよう、B・Bに入り込む。前にも説明したが、正確にいうとこれは、裏の国家機密にあたるものだ「通称・裏国」と呼ばれている。

前にも言った通り、リストまでは簡単に引き出せる。でもボックスはそうはいかない。バレた場合は一つ、それ「死」だ。

昔、一度だけ引き出したことがある。まだ一人でいた頃に。

その時は運よくバレなかったが、今回バレないとは限らない、だが調べなければならない。

B・Bに載っている人物を殺してはならない…。裏国はわざと生かしているのだから。もしも知らずに殺してしまうと、厄介なことになる、下手をすればこれも、「死」につながる。まあ、その死に方にもよるが。

伊藤周蔵が載っているか載っていないか。調べ始めると、アクセスしてくる者がいた。様子を見る、名は出さず問う。返答は…、なんと、名を出して来たのだ。名は黒木竜次。相手が名を出したからといって、こちらの名を出すわけではない。

用件を問う。

返答：

『伊藤周蔵の暗殺を許可する』だった。

裕希は、『どうも』と返事して切った。
しばらく考える。

チツと舌打ちをする。

「…味な真似してくれるじゃないか」

誰だか知らないが、よく伊藤周蔵を調べているとわかったな…。

なぜだ…？

なんにせよ、侵入は失敗したということだ。

「くそっ！」

アジトに戻り、寺島に連絡する。

黒木竜次という人物が存在するか調べるように言う。

裕希の中では裏国のものだと、それもかなり上の人間だと…直感している。

翌朝、宮内との約束の時間より早くついたので、店の中に入り窓際のテーブルに座って待つことにした。

寺島とは会話をしない。

窓の外を見ながらボーツしていると、ポンツと肩を叩かれた。

振り返ると宮内部長が立っていた。

「待たせたね。席とつといてくれて助かったよ。昼時は混むからね」

そう言いながら席に座る。

「いらっしゃいませ、ご注文は何にいたしますか？」

店員が、注文を聞きに来た。

「何にする？ 何でもいいよ」

「じゃあ、サンドウィッチとコーヒー」

「俺はランチでコーヒー、お願いします」

「かしこまりました、少々お待ち下さい」

そうして食事をしながら時間を潰す。

食事を終え、店を出る。

「部長、本当にお金いいんですか？」

「ああ」

「ありがとうございます」

ほんとは、おごってもらったりするのは、あまりというより、したくないんだけど、まあいいか。

伊藤の家に着く。

「いますかね？」

居なかったら意味がなくなってしまう。

「さあどうだろうな。今日は連絡入れてないからな
ピンポン。」

インターホンを押す。

しばらくして、伊藤周蔵が出てきた。

「…ああ、この間の人だね、おや、そちらの子は？」

「突然お伺いしてすいません。彼女は勝君の彼女だった、江藤裕希
さんです。どうしてもお線香をあげたいと」

「はじめまして」

おじぎをする。

こいつが、伊藤周蔵か…。

「そうですか、あなたが勝の…立ち話もなんだから、奥へどうぞ」
「おじやまします」

「コーヒーでいいかな？」

そう言つて、テーブルの上に置い。

「どうぞお構いなく。すぐ失礼しますから」

伊藤は裕希のほうを見ている。

裕希は下を向いているが、気付いている。

殺気まじりの視線…。

顔を上げる。伊藤と目が合う。

「…何か？」

「いや、こんな可愛い人が勝の彼女とは、あなたにはなんと言った
らいいのか…」

「そんな、あたしのほうは大丈夫です。おじ様のほうこそどうぞ氣を使わないで下さい」

我ながら、けっこう良い芝居だ。

「ありがとう」

伊藤は、下を向き目頭を押さえている。

「……………」

部長のほうを見る。部長は頷く、

「僕達これで失礼します。ごちそうさまでした」

席を立つ。

「そうかい？ また遊びに来て下さい」

「はい。お邪魔しました」

残念だけど、また…は、ないよ。

部長に家まで送ってもらっている。もちろん実家のほうにだ。

裕希は、宮内に一つ質問した。

「先輩、前回もあの父親は、最後に顔に手をあてて下を向いてました？」

「ああ、そういえばそうだね」

「…そうですか」

「それがどうかした？」

「一つわかったことがあるんです」

まあ、これは言っても大丈夫でしょう。先輩も思っていたことだらうから。

「何がわかったんだ？」

「あの父親は、息子の死を全然悲しんでいません。みんな芝居です」部長はしばらく黙っていたが、一呼吸おいて言った。

「…俺も、今日来て確信したよ。認めたくはないけどな」

「誰でもそうです」

いろいろ話しているうちに、家に着いた。

「今日はごちそうさまでした」

「いや、裕希ちゃんも芝居上手かったよ。それじゃあ部活でね」

「はい、ありがとうございます」

宮内の姿が、見えなくなるまで見送る。

冷たい笑みを浮かべる。

伊藤周蔵が付けてきていることは気付いていた。

「所詮、素人だね」

アジトに行こうと向きを変えたとき、家の中に誰かがいる気配を感じた。

電気はついていない。ということは、父親ではない。

「……」

気配を消して玄関に近づく。鍵を開け、銃に手をあてながら中へ入る。

気配の主はリビングにいる。

念のためサングラスをかける。

リビングのドアを開ける。

相手からは、殺気が感じられない。

「……誰……」

問いかけても答えない。

……ぜだだわからないが、黒木竜次だと思った。無論、会ったことはない、が、そう感じた。

だが違ったのだ、気配の主は寺島だったのだ。

いつもと気配が違う。しかし、黒木だと感じたのも嘘じゃない。

どうということ……。

……まさか。

でもそう考えるとなぜ私の行動を知っていたのか納得がいく。

私生活のことは、一切口にしないのが決まり。知っているものもいるが、互いに了解していなければならない。

結論。寺島＝黒木。

裕希は、銃口を黒木に向けた。

この時点で、暗殺者カーリーになる。

カーリーは、銃を向けたまま

「契約は、白紙に戻す」

と、命令口調で言った。

寺島、いや黒木が、封筒を置いた。

見なくてもわかった。黒木の調査書だ。

「……どういつつもり？ バカにするのもいい加減にしてほしいね」

「バカになどしていません、あなたを、騙すつもりはありませんでした」

カーリーはため息をつく。

「言い訳はいい」

銃で、帰れと促す。

黒木は動かない。

ハア……

仕方ない。

「今回は見逃してあげる。出ていく気になったら、鍵閉めて行っ
ね」

銃をしまい出ていく。

門を出るとき、何かが足に触った。

瞬間。左腕に激痛が走った

「……っ」

チィ……。左腕に矢が刺さっていた。

ガサッ。

逃げて行く気配が一つ。

「……奴か」

ただの脅しだね。殺す気なら、今までみたいにするだろう。

わざわざ彼女の振りをしたんだ、これぐらいしてもらわなければ。

まあ、矢が飛んでくるとは思わなかったけどね。

痛ッ……

「……っ」

矢を抜く。

…怪我の治療しにアジトへ戻るか。
と、その前に。

「黒木、さすがに気配を消すのはうまいね。でも、気配を消して私の後ろに立たないことだ、死ぬよ」

黒木が後ろにいることは気付いていた。簡単なことだ、玄関の扉の閉まる音がしなかったからだ。

アジトではなく、再び家の中に戻る。

傷の手当をしている。

気分が晴れない…。

なぜこんなにも胸が苦しい？

「……明日は、部活だな……」

翌朝。

部活は午後からだ。

昨夜は一睡もしていない…。

「……」

怠いけど仕方がないな。

学校にでも行くか…。

休日でも部活のために門は開いている。

風が気持ちいい。

屋上に一人いる。

校庭で、野球部が練習している。ボールを打つ音が聞こえる。吹奏学部の演奏も聞こえる。その他の音はない。

静かだ。

時が止まったみたいだ…。

「……平和、そのものだね」

私には、無縁のものだ…。

心の休まる場所は、もう ないのかもしれない。

「ゆうきちゃん…」

ボーッと、景色を見ていると、呼ぶ声が聞こえた。

下を見ると、あやさんが手を振っている。

裕希も振り返す。

「おはようございまーすっ」

階段をかけ降り、部室に向かう。

コンコン。

話合いをしていると、ドアがノックされた。

「はい」

あやさんが返事をしてドアを開けた。

男子が一人立っている。

「あら」

「こんにちは」

「今度は何の用だ。西岡」

と、部長が言った。知り合いのようだ。

「いやなに、ちょっと手を貸してほしいんだ」

「お前のちよつとは、当てにならないんだよ」

斎北が嫌そうな顔をする。

裕希は、先輩たちのやり取りを、ボーッと見つめていた。

「今回は大丈夫だって、ただちよこつとだけ、映画に出るだけだから」

「映画ー!？」

四人声を揃えて言った。

「さすがっ。息があつてね」

「おいおい。俺たちは便利屋じゃないんだ。わかってるのか」

西岡はニツコリと笑う。

「もちろん。どーせ今依頼入ってないんだろ？」

「まあ、入ってなくもないが…」

「じゃっ、決まりだな。詳しいことは後で連絡するから、じゃな、よろしく」

ボタンッ。

そう言っ出て行っってしまう

「相変わらずだなあ」

齋北が苦笑いをする。

「ホントよね。あっ、裕希ちゃん今の彼はね、…裕希ちゃん？」
「……………」

裕希には、あや子の声が届いていない。

無論、今までの会話も聞いていない。

みんなが裕希を見る。

「裕希ちゃんっ」

肩を叩かれ、ようやく気付く。

「えっ、ハイ。何ですか？」

みんなが自分を見ているのに気付く。

「あたしの顔に何か付いてますか？」

「うっん。それより裕希ちゃん、何かあったの？」

「えっ、別に何もない…！」

ポタ…。

言い終わる寸前、一粒の涙が落ちた。

「どうしたの？ 私たちに話せないこと？」

あや子が裕希と同じ目線で心配そうに聞く。

「たいしたことじゃないんです。信頼してた人に裏切られたんです。自分が勝手に信頼してただけなんですけどね」

「そう…、元気出して、私にはこれぐらいしか言えないけど」

あや子の優しさが、痛いほど伝わってくる。

「いいえ」

その優しさが染みて、よけい涙が出てくる。

自分でも驚いている。涙など出ないものだと思っていた。涙など

邪魔だと。

「…ちよつと失礼します」

裕希は断つて水道に行った。

その間も涙は止まらない。

こんなんじゃないだめだ、失敗する。

…また一人に戻っただけだ。そう、自分に言い聞かせた。

涙は止まった。

もう、今まで裕希ではない、そう、昔の誰とも組まなかった頃の自分に…。

顔を洗い、一息つく。

「……………」

部室へ戻る。

部室に戻ってきた裕希は、いつも通りの裕希に戻っていた。

「大丈夫？」

あや子心配そうに聞く。

「はい…、もう平気です」

このとき宮内は、裕希の微量の変化に気付いた。

裕希が帰ったあと、宮内はこのことをみんなに言った。

「俺も感じた」

斎北が言葉。

「私事です」

水野。

「あたしも気付いたわ」

みんな気付いていた。

裕希は、気付いていなかった…。

アジトに戻った裕希は、暗殺の準備をしている。
今回は遠くからではなく、ターゲットの前に姿を現して直接狙うことにした。

腕の傷のお礼をするためだ。

コンコンッ。

「……………」

玄関のドアをノックする音がする。

気配を消して、静かにドアに近づき穴から外を覗く。

黒木が立っていた。

「……………」

電話番号を教えてあったな。住所を調べることなどたやすいな。

「……………何か」

ドアを開ずに聞く。

「……………開けて下さい……………」

小声で黒木が言った。

「……………少し待て」

裕希は部屋に戻り、必要な物を取りあえずケースに入れた。

玄関に行きドアを開ける。

ガチャ。

黒木を中へ入れる。

彼女を見たとき黒木は、彼女の『気』が変化していることに気づく。それは、昔の、初めて出会った頃の彼女そのものだった。

裕希は、裏国にここが知れてしまったから変えなければならいなど、暗殺の準備をしながら考える。さっきケースに入れた物は、予備の銃やフロップピーなど、場所を移動するために必要な物だ。機械類は必要ない、あとで揃えればいいことだ。いつもそうしている。今度のアジトは地下にしようかな。

準備をしている裕希の姿を見て黒木は、
「傷のほうは大丈夫なんですか？」

と、聞く。

裕希の動きが止まる。問いには答えない。

「……………用件は」

と、今度は裕希が聞く。

裕希は背を向けたままだ。

黒木は、裕希の後ろ姿を見ながら答えた。

「貴女を、騙すつもりはありませんでした。最初、出会った頃は貴女も、他の暗殺者と同じだと思っていました。だから、いつも通り監視していました。ですが違った……」

「……だからあの時、アクセスしてきたと？」

裕希は、ゆつくりと立ち上がり、黒木を見る。

「……所詮アナタは、裏国の人間ということよ。まあ、私も気を許したのが悪いんだけど、まったく、どうかしていたよ。……用はそれだけかい？」

完全に、以前の裕希に戻っている。

一度起きた奇跡は二度と起きない。今までの彼女に戻ることは、もう、ないだろう。

裕希は、黒木から目を離さずに言った。

「契約は白紙になったんだ。用がなければ二度と私の前に姿を現すな。お帰り願いましうか」

黒木は裕希の瞳の中に、悲しみの色が浮かんできているのを知っている。それは今まで以上に増しているのを感じた。黒木は己の所為だと知った。

裕希に近づき触れようとすると、銃をつきつけられる。

「死にたいか？」

「……構いません、貴女を裏切ったのですから」

そう言いながら、裕希の顔に触れた。

裕希は、顔には出さないが、少し戸惑った。

「……」

黒木を殺す気はない。裏国を敵にまわすほど馬鹿ではない。

「……今夜は行かないほうがいい」

突然黒木はそう言った。

裕希には、何のことだかわかった。

「奴がいらないのか？」

「そうです…」

裕希の顔に触れたままだ。

黒木は、何か言いたそうな顔をしている。

「…なんだ」

裕希がそう聞くと、意を決したかのように口を開いた。

「……契約をして下さい」

裕希はため息をつく。

「そんなことか、それはできない。悪いけど、私は一人に戻ることに決めたんだ。誰とも契約をする気はない」

「契約をしなければ貴女を…」

黒木は途中で言葉を切ったが、裕希にはわかった。
なるほど。

黒木の手をどけて、クツと笑う。

「私を殺すのか、…今のアナタには無理だ。しかし、これ以上親不孝するわけにはいかないのでね、死ぬわけにはいかないんだ」

このあと小声で、『死にたくてもね』と言ったことも、黒木は聞き逃さなかった。

黒木から離れ、さっき用意したケースを持って、

「交渉は決裂だ」

そう言って部屋を出た。

少し歩き、走り出した

バイクに乗り走り出す。

ナンバープレートは、かくしてある。

走り去る姿を、窓から見ている黒木。

一言。

「…裕希」

と、呟いた。

すると、背後から声がする。近くにもう一人いたことなど、このときの裕希には気付かなかったであろう。

「なぜ殺さない」

その声の主は黒木は、

「彼女はまだ十六です」と答えた。

「ならば、父親が死んだことは私から伝えよう。…ミイラ取りがミイラになってどうする」

声の主は、そう言っ出て行つた。

「もう なってますよ」

一人となつた黒木はそう呟いた。

先ほどの声の主は、車に乗り込み、部下らしき人物に命じた。

「カーリーを追え」

「かしこまりました」

裕希は図書館にいる。

もう一度、伊藤周蔵を調べるためだ。この間は、黒木の邪魔が入つたからな。

警備室に催眠ガスをまき、眠らせる。

眠つたのを確認した後、コンピュータールームに行く。

無事潜入できた。

椅子に座り髪を触ったとき、何か小さな硬いものに触れた。

「……………」

見なれたものだった、発信機だ。

発信機をコンピュータの横に置く。

黒木は来ないと確信していた。

かまわずデータを引き出す。が、データは消されていた。

「ちつ。遅かったか」

伊藤周蔵のデータは、抹消されたのだ。

このとき、上に上がってくる一つの気配に気づいた。

「なかなか、早かったじゃないか」

カツン…。

裕希の後ろに立つた。

発信機を後ろに投げた。

しばらくの沈黙。

口を開いたのは、相手だった。

「カーリーに報告することがあります。実は、貴女の父親、江藤洋一氏が亡くなりました。」 裕希の動きが止まった。

死んだ……？

父さんが…。

なぜ、こやつが……。

…まさか、それじゃあ…。

裕希は立ち上がり

「裏国の方が知らせたということは、父は…、父は裏国の者だったんですね。そして、私のことも」

「そうです」

裕希は、顔色一つ変えずに相手と向き合った。そして、浅く頭を下げ言った、

「総頭自らのお運び、ありがとうございます」

裕希の言葉に驚く相手だった。

「なぜわかる」

その問いかけに裕希は、少しの笑みを浮かべた。

「『気』が違う」

一礼をして去る途中、

「私を殺すのは、私が仕事を終えてからにして下さい」と言った。

総頭は何も言わなかった。ただ裕希の去る後ろ姿を見ていた。

「……」

このとき総頭の頭の中では、一つの考えがあった。

裕希を追った。

図書館から出てきた裕希は、バイクの前で立ち止まった。

一粒の涙が、一方の頬を伝う。

父親のことは、考えなくなかった。

バイクに乗ろうとしたとき、総頭に呼び止められる。

「まちなさい」

「…何か」

裕希の前に、一台の車が止まる。

「……」

「奴はいつでも殺れる。少し私に付き合ってもらえないか？」

返答はしない。

しばらく黙る。

「…いいだろう」

「用件は？」

話を切り出したのは裕希だった。

「今後の貴女のことだ」

「なに」

今後の私のことだと？

何を言っているんだこの男。

私とは何の関係もないだろう。

「ハッキリ言え、何が目的だ」

総頭はタバコを取り出し火をつける。

その動作を冷たい目つきで見る。

「目的というより、私からのお願いです。先ほど言ったことも本当だ。…私の傘下に入ってもらいたい」

「…裏国に入れと？」

「そうだ」

…さつきと口調が変わってきたじゃないか。

自分の利益になることだけで、不利になることは考えんのだな。

これだから組織は嫌いなんだ。

「私が入るとでも？ 人に命令されるのは嫌いです。しかし組織という縄に縛られるのも大嫌いだ。私は今まで通り、一人でやっつく」

「では、断ると?」

「そういうことになるね」

「私の願いは叶わなかったようだ。では、別の願いなら叶えてもらえるかな」

別の願い

「別の願いだと?」

「なに、たいしたことじゃない。貴女が嫌というのなら無理に入る気はない。だが、このままでは、仲介者たちに我々の息がかかり、貴女は仕事が出来なくなる」

「…何が言いたい。アナタは総頭だろう、回りくどい言い方はよせ」
「私と個人契約してもらう」

「なんだと」

「仕事が出来なくなる前に、貴女自信がいなくなる。貴女ほどの腕の持ち主は、シリユウを抜かして他にいない。私は、貴女を失うわけにはいかないのだ」

車は、いつのまにか家の前に着いていた。
ガチャッ。

運転をしていた部下が、裕希側のドアを開けた。

裕希は何も喋らず降りた。

「良い返答を待っている」

ドアが閉まり、車は走り出した。

裕希は、その場に立ちつくしている。

「……もう一つ、仕事ができたわ……」
と、呟いた。

家の中に入り、今後のことを考える。

私にはもう何も無い。殺してくれば気が楽なのだが、そんな気はないようだね。

もし、契約をしなかったとしたら、殺さないまでも、操られるだろう。自我も失って、抜け殻のように。

そんなのはご免だ。

しかし、奴と契約するのも嫌だ。

奴は、ターゲットが白でも殺しそうだ。

「……だけど、もう一つ仕事が出てしまった。……組織を潰すという大事な仕事だ」

第3話・決意・

明朝、伊藤周蔵のところへ行く。

気配を消して家の中に入り、奴の気配を探る。奴はリビングにいた。私の気配には気付かない。何か荷造りをしている。

カーリーは少し離れてたっている。

「……何をしている」

そう話しかけると、奴はビックリと体を震わせ振り向いた。カーリーの顔を見たとき、少し驚いたが、笑顔に変わった。

「どうしたんだね」

と、優しく聞く。

その言葉に、冷たい笑みを浮かべた…。

「いえ、チャイムを鳴らしたんですが出てこないの、どうしたのかと思ひまして」

冷たい言い方。

言い方でそれは嘘だとわかるものだ。

しかし、この男はそうとう動揺しているようだ。

「それはスマナイ、で、何の用かな」

と、言った。

私は思わず、クツと、笑った。

それを見た奴は、怪訝な顔をして言った。

「何がおかしいんだね」

「いや。…実は、あなたへの頼まれごとと、お礼がありました、ここへ来ました」

「頼まれごと？」

「はい。それよりもまず、お礼をさせて下さい」

「なんのだ」

「お忘れですか？ 私の腕に矢を刺してくれたお礼です」

「何のことだ？ 私は知らない」

奴はあまでシラを切るつもりらしい。まあ、いいだろう。

「…では、本題に入りましょう。私は、あなたを殺してほしいという依頼を、ある人物からもらい、あなたを殺しに来ました」

その言葉を聞いた奴は笑いだした。

カーリーは冷たい目をしてそれを見る。

「何を言い出すかと思ったら、冗談はやめなさい。もしそうだとし
ても、いったい誰がそんなことを頼んだんだね」

と、笑いながら言った。

「あなたの息子からです」

「勝だと？ …クツ。ハッハッハッ」

またか…。

だが、カーリーの冷たい目付きを見たとき、笑いは止まった。
やつと終わったか。

「私は勝さんの彼女ではない。あなたを調べるための芝居だ」

奴は驚きを隠せない。

カーリーは笑っている。

冷酷なまでのカーリーの態度に、だんだんと恐怖がつのっていく。
恐怖のためか、奴の声は震えている。

「ま…、待ってくれ、なぜ私が、殺されなければ…」

ほおー。

ここまで来てもまだシラを切るか。

たいした度胸だ。

だがこれまでだな。

「理由など知らなくてもいい。…そうだな、一つだけ教えてやろう、
お前は、B・Bに載っていたよ」

「…載っていた…？」

なぜ過去形なんだ…。

「過去形なのは抹消されたからだよ。その意味はわかるだろう。さ
あ、長話は終わりだ、奥さんと息子さんのところへ逝くといい。逝
って詫びるといい」

言いながら銃を取り出し、奴に突き付ける。

「やつ…、やめ」

奴が叫ぶ間もなく引き金を引いた。

消音にしているので、銃声は聞こえない。

「さようなら」

一言そう言つて、カーリーは去った。

一度家に戻り、制服に替える。

午前十一時半過ぎ。

軽く昼食を取る。

コーヒーを飲み、一息つく。

「…疲れた」

今回は喋り過ぎた。いつもの倍は喋ってる。

短期間にいろいろなことが起こりすぎた。

「……………」

父さんが、裏国の人間だったなんて、頭ではわかっていても、まだ信じられない。けど…、信じざるを得ない…、テレビで報道されていないことが、そのことを証明している。

……どんな気持ちで…、手紙を書いていたんだろうか、娘が、殺し屋なんて、やりきれなかっただろうに…だから嘘をついてまで家には帰ってきたくはなかったのだろう。

父さんを騙したまま終わってしまった。

そして、また、あの人達も騙したまま、終わってしまうことになるのだろう、きっと。

「部活も…、やめなければ…」

学校と…ね…。

組織自体を潰すのは難しい。

へたをすれば、逆に殺られる。

しかし、奴の懐に入れば裏国の中に侵入するのは簡単だ。そして、

そつと機会を待つ。

期限は…、三日。

三日のうちに潰す。

期間中、学校は辞めない。

昼休み三年の教室に行く。宮内に退部届を渡しに。

宮内を呼んでもらう。

「すいません、宮内先輩いますか？」

「宮？　ちよつと待って」

その人は、そう言つて部長のところへ行つた。

部長は何かを書いてる途中だった。

「宮、一年生が呼んでるぞ」

「ん？」

宮内は書くのをやめて、入口を見た。

裕希は軽くお辞儀をする。

「可愛い子じゃん、紹介して」

「ダメだ、だいいち彼女いるだろお前」

裕希のほうへ歩いて行く。

「君、名前は？」

「江藤です」

なんだこの人。

「ほら、彼女が待つてるぞ、早く行け」

「はいはい、じゃあね江藤さん」

「はあ」

そのい人は走つて彼女のところへ行つた。

何なんだあの人。

宮内はため息をついた。

「まったく、気にしないでいいよ、裕希ちゃん」

「はい」

「それより、何か用かい？」

「あ、はい。実は…」

そう言って、退部届を出した。

宮内は、何も言わずに受け取った。

何も言わずに受け取った宮内を見て、裕希は少し驚いたのと同時に優しさを感じた。

「部長…。ありがとうございます。すみません」

「謝ることはない。誰にだって人に言えないことがある」

「すみません」

「みんな裕希ちゃんが好きだ。時々、遊びにおいで」
優しい言葉。

たいした言葉でもないはずなのに、それ以上の優しさがあった。
涙が出てきた。部長に見られたくないの、下を向いた。

「部長、ありがとうございます…。それじゃあ、失礼します」

「ああ、みんなには言っておくよ」

お辞儀をして去った。

…不思議だ。

先輩達の前だと不思議と涙が出てしまう。カーリーとなった今でも。
も。

「…不思議だね」

ああそうだ、奴が死んだ今、先輩達はどうするのだろう。

あんなことを言ってしまった私にも、責任があるのだが。

「あとで聞いてみるか」

だが、その答えはすぐに出た。

教室に向かっている途中、二年生が話しているのを聞いた。

それは伊藤勝のことだった。

「ショックだね。自殺って聞いたときもショックだけど、まさか、
父親に殺されるなんて」

「あー、今朝の新聞に載ってたやつでしょ。父親も自殺だってね」
自殺…。なるほどね。

「近藤さん、ショックだろうねえ」

…フウっと、裕希はため息をつく。
ため息ばかり。でも、これでスッキリした。
部長も新聞を読んで知っていたんだ、だから言わなかったんだ。
裕希は教室に戻った。

放課後、教室に誰もいなくなるまで待った。なぜだか一人になり
たいと思った。

ふせて寝ていると、廊下を走ってくる音がした。
一人だ。

それはだんだん近づき止まった。

「裕希ちゃんっ」

いきなり私の名を呼んだ。

その声には覚えがあつた。

顔を上げ、走り寄ってくる人物を見た。

「あや子さん」

そう、あや子だった。

あや子が入るなり裕希の手をガシッと握った。

「…あや子さん？」

「部をやめるって本当なの？」

「……はい……」

「どうしても？」

「はい。すいません。…三日後、学校もやめます」

「えっ？」

いつのまにか教室の入口には、宮内部長・水野さん、斎北さんが
立っていた。

「…先輩」

「学校もやめちゃうのか？」

「…はい。残念ですが」

「ほんとに残念で悲しいわ」

「あや子さん、…まだ、三日もあります。遊びに行きますよ」

行けないかもしれない。それよりも、学校にさえ来れないかもしれない。

裏国内部の調査が、スムーズにいけば来れるけど。

「裕希ちゃん」

水野さんが近寄ってきた。

「はい、何ですか？」

「いろいろな意味を込めて、頑張つてね。それから、探偵部のメンバーとして、裕希ちゃんの記録をちゃんと残しておくよ」

「ありがとうございます。とても嬉しいです」

「手紙、ちょうだいね」

手を握ったまま、あや子が言った。

「俺達にもな」

いつのまにか全員、私の周りに来ていた。

「もちろんです」

たった、数日しか経っていないのに、こんなにも私のことを想ってくれている、言葉に出す優しさより、言葉に出さない優しさを人より持っている人達。

「同じものを持っている人物を、私は知っていた。」

昔の事だけだ。

「不思議に、この人達となると心が安らぐ。」

唯一、私、江藤裕希に帰れる場所。

「短い間でしたけど、先輩達に出会って本当に良かったです。ありがとうございました」

裕希は、今までで一番最高の笑みを浮かべた。

もし、自分を見失いそうになったとき、もう帰ることはできないけど、この人達の事を思い出そう。ただの十六才の少女に戻させてくれる、この人達のことを……

「と、思う裕希だった。」

先輩達に家まで送ってもらった。

「さて、気合いを入れて敵陣に乗り込みますか」

「と、その前に、最後に寄っていくかな。
…いるかどうか、わからないけど」

午後八時。

スーツに着替える。

ケースには、予備の銃と弾。そして、時限爆弾…三つ。

愛用のリボルバーは、脇にセットしてある。

このケースは途中で隠していく。とりあえず下調べの段階だ。
総頭に、気づかれないようにしなければ。

「…行くか」

コツコツコツ…。

「……………」

裕希は店の前にいた。

店の名は「HELP」…。

キー…。

扉を開け中へ入り、カウンターへ向かう。

「……………」

サングラスはしている。

カウンターが見えた。

黒木は…いた…。

コツ…。

裕希は足を止めた。

黒木はこちらに気付き、顔をあげながら言った。だがその言葉は
最後まで言われなかった。

「いらっしやい…」

黒木の動きが止まる。

コツ…、コツ。

裕希はカウンターの前に座る。

サングラスは取らない。

「…相変わらず、カウンターには誰も座らないようだね」

「…今日は、髪を下ろしているのですね」

「ウオッ力を一杯くれない？」

「…わかりました」

黒木は後ろを向き作っている。その後ろ姿を裕希は見つめている。そして…。

「総頭と契約をした。…というより、これから返事をしに行くのだが」

黒木の動きが止まる。

「そう…、ですか…」

心なしか、声が震えている。

ウオッ力を裕希の前に置く。

「……」

黒木は何も言わない。

裕希はウオッ力を一口飲んだ。

「…ごちそうさま」

お金を置き、席を立った。

去る途中、後ろを向いたまま言った。

「…寺島という人は、私の性格をよく知っていた。会ったら伝えてほしい、最後の契約者が貴方で良かったと」

キー…。

コツコツコツコツコツ……。

足音が遠ざかっていく。

「……」

あの人が、総頭と契約。

『…会ったら伝えてほしい、最後の契約者が貴方で…』

最後の契約者？

…最後…

「……！」

まさか…。

黒木の頭に、裕希の言葉が蘇る。

『私は、誰とも組む気はない。…寺島という人は、私の性格をよく知っている』

「…貴女は、組織をつぶして死ぬおつもりですか…」

黒木は、裕希の考えがわかってても、追おうとはしなかった。いや、追いたくても追えないのだ。なぜなら、そのことを裕希が望んでいないことを、一番よく知っているからだ。

「またお会いできることを、願っています」

だが、この願いが叶うことはないと知っていても、願わずにはいられなかった。

ケースはとりあえず隠し、総頭に会う。

「…失礼。総頭と会う約束をしている。取り次いでもらいたい」

「しばらくお待ち下さい。あなた様のお名前は？」

「…カーリー」

門番が総頭に取り次いでいる間、監視カメラに気づかれないように、小型通信機を壁に飛ばす。

「お待たせしました。総頭がお会いするそうです。こちらの道を真っ直ぐ行きますと、案内人がいます」

門が開く。

「ありがとうございます」

言われた通りの道に行く。この間も周辺のチェックをする。人はいないが、木に隠れて監視カメラが設置されている。

しばらく行くと、扉のところに女の人が立っている。

「私をご案内いたします。どうぞこちらです」

ピッピピッ。

暗証番号…か

部外者にはわからなくなっている。

FBIのと同じだ…

ウィーン。

扉が開き中へ入る。

それからいくつもの扉があり、暗証番号を入力していく。違う番号に見えるが、同じだ。

「ここは、直接総頭の部屋に通じているのか？」

一つの質問をする。

「そうです」

女は、今までで一番大きい扉の前で止まった。どうやら着いたらしい。ここまで来るのに七分。

女はボタンを押す、

「総頭、カーリー様をお連れいたしました」

と言った。

すると、扉が開いた。

この扉は、総頭だけが番号を知っているようだな。

「入りなさい」

「……」

カーリーが中へ入ると、女は戻っていった。

総頭とは距離をおく。

「答えを聞かせてもらおうか」

「…答えはYESだ。だが、前にも言った通り私は命令されるのは嫌いだ」

「わかってる。ここに入ったりするのは自由だがここことはシークレットだ。ここは中枢部だ。気をつけたまえ」

「わかった」

…私の知リたかったことを教えてくれたね。それだけ分かれば充分だ。

「とりあえず今は、君に頼むほどの仕事はない。ああそれから、明日といっても、もうすぐ日付は変わるが、明日明後日と、幹部会を開く」

……！

「…そうか」

まずいな…予定が狂った。

仕方がない。夜が明けないうちに仕掛けるか。

ケースを取りに行かなければならないな。

「総頭、荷物を取りに行ってもいいか」

「かまわんが、私は会議の打合せに行く。戻ったら、私が戻るまでここを出るなよ」

「命令されるのは嫌いだと言ったはずだが」

「ああスマナイ。ついいつもの癖だな」

フンツ。どうだか。

午前一時、クラブ・ヘルプ。

「店長どうかしたんですか？ 顔色悪いですよ」

バイト中の宮内が聞く。

「あ、ああ、何でもない」

「そうですか？ 何か心配ごとでも」

心配…

「……、悪い宮内、ちょっとここ頼む」

「はい」

私にどうこうできるものではないことはわかっていても、やはり貴女を失うことはできない。

失いそうになって初めて気付いた。

「今度ばかりは、自分の気持ちに従います」

店を閉め、裕希を追う。

裏国

ケースを隠してある場所まで戻る。そう遠くはない。特殊技工をどこしてあるレイバンに変える、暗証番号が見えるようになっている。簡単にいえば、指紋が浮かび上がって見えるということだ。

ケースを持ち戻る。

暗証番号を解いていく。ついでに、爆弾を仕掛けていく。

この通路は、先ほどの女しか通れないようだ。監視カメラがない、何かあったときは、その女が犯人だとわかるからだ。

通路に仕掛けが終わり、あとは総頭の部屋だけだ。

爆破時間はちょうど三時間後の明朝六時。

組織壊滅が目的だが、まあ、機能不能になればいいか。

中枢部がやられれば、連動してほかの部分が爆破しだすだろう。よしつ。セット完了。

爆破ぎりぎりまで部屋にいななければならない。

窓から外を眺めていると、総頭が戻ってきた。一人だ。

総頭は、机に組込まれているキーを押した。スクリーンに映し出されたのは、ある一室、その部屋には人が八人いる。

「この部屋は、今君が見ていた所だ。この八人は幹部の者達だ」
ずいぶん早いな。

「早い集まりだな、まだ夜中の四時だというのに」

「ああ。時間を早めたんだ。実はこれから会議に行くが、悪いが、少し待っていてもらいたい」

「時間は？」

「二時間」

「六時」。

「……いいだろう」

……あれから一時間半……。

午前五時四十五分。
爆破まで十五分。

「……………」
死ぬかもしれない。

「……フッ」
なにを今更ら、もともと死ぬ気だったじゃないか…。
奴らと心中するのは嫌だけど。
五分钟前…

ドォーンッ！

外を眺めていると、いきなり爆発音がした。
なんだっ？

「まだ時間じゃない」
「いったい誰が？」
ウーンッ。
ハッ。

「…総頭…いったい何事」
「見ての通りだ。どうやら犯人は黒木のようなだ」
え？。

「残念です」
くろ…き…？

カチッ。
時計の針が六時を指した。
ドォーンッ！

最初に仕掛けた爆弾が爆発した。
もうすぐこのやつも爆発する。
カーリーは覚悟を決めた。

「……………」
ピーッ。ピーッ。

総頭が無線を取る。

「今度はどこだ」

「…ここだよ」

総頭の動きが止まる。そして、カーリーを見る。

「まさか、キサマ…」

総頭の顔に、怒りの色が浮かんだ。

ドオオオンッ、次々と爆発している。

「その通り…、最初に言っただけだ、私は一人でやると。だけど考えが変わったんだ」

「…死ぬつもりか」

クスッ。

カーリーが目をつぶり…。

ドオオンッ。音が近づいた。

「…あとはここだけだ。逃げ場はもうない」
ハッハッハッ。

「たいした奴だ。貴女のことを読めなかった私の責任です。私の負けです」

「裕希さんっ！裕希さんどこですっ」
ウッ。

火がまわっていて、先に進めない。この通路を爆破したのか…。
あの人は本当に。

「貴女のことなど、わかりたくなかった」
残りは中枢部。

そう思って向かおうとしたとき、

ドオオンッ！

今までで一番大きい爆発…。
それは中枢部からだった。

黒木は、よろめきながらも火をくぐり、なにもかも吹き飛んだ中枢部の前に立ちつくす。

「…ゆうき…」

黒木はそれしか言えなかった。

カラ…

ふと、音がする。

「…くろ…きか…」

人がっ！

「裕希、裕希さんっ」

黒木が駆け寄る。だが…、声の主は…

「…総頭…」

黒木は愕然とする。

「そう…、ガツカリするな、ほら…」

そう言いながら、総頭は横にずれた。

そこには、気を失って倒れている、裕希の姿があった。

黒希がそつと触れる。

「…裕希さん」

「安心…しろ。気を失っている…だけだ」

どうやら裕希を庇ったらしい、そのせいで総頭は傷だらけだ。

「早く連れていけ。人が集まる」

「しかし…」

「早く行けッ。安心しろ、今後、彼女には手は出さない。本当だ。

私もミイラになったようだ」

壁に寄りかかりながら言った。

「…総頭」

総頭はニツと笑って、早く行けと促した。

黒木は裕希を抱き上げて、

「ありがとうございます」

と言って去った。

第4章・依頼

とある一室、二人の男が話している。

「君に頼みたいことがある。この者を始末して貰いたい」
ある男がそう言った。

そして、ある男はその写真を取り言った。「カーリー」と
「やってくれるな、君にならできるだろう、カーリーと一・二を争
う、ほぼ互角の君になら、シリユウよ」
「わかった」

……体が重い……

ああ、そういえば。私……は、痛みを感じるということは、私は生
きているのか……

体が動かない。『裕希』 誰かが呼んでいる。
懐かしい声のような気がする。

「裕希」

誰だろう。重いまぶたを開く

「……」

「……裕希……」

目に入った人物は、安堵の色を浮かべている。

「黒木……」

「はい」

「……勝手に名を呼ぶな」

「はい……」

クスクスクス。黒木が笑う

「何がおかしい」

「いえ、ご無事でなによりです」

無事……。そう。

「黒木」

裕希は起きあがる。

「はい」

「なぜ私を助けた。なぜ私は生きている」

「……」

黒木は黙っている。

「答えなさい黒木」

話そうとしない。

「……総頭はどうした。私が生きているのなら生きているだろう。……」

……そう　だ、あいつは、総頭は、私より怪我が酷いはずだ。そうだな？」

そう、思い出した。

「……はい、その通りです。貴女は、総頭に庇われていました」

「…………」

ちっ……。

裕希は、総頭に助けられたことが氣にくわない。しかし、本意ではないにしろ、助けられたことは確か。

「……今何時……」

「十一時半です。どこへ」

「学校に行く」

「そんな体で？」

「たいしたことない」

ベッドから起き上がり、いったん家に帰る支度をする。

フウツ。ため息をつく。

「黒木、とりあえず礼は言っておく」

午後一時三十分。

職員室に行く。

「先生」

「おつ。江藤来たな。大丈夫か？これ前中に配ったプリントな」

「はい。じゃ、失礼します」

「あつ、ちよつと待った」

「？　なんですか」

「校長が呼んでるからすぐに行ってくれ。授業のほうはいいから」

「はあ……」

ガラガラ。ぴしゃん。

「……………」

なぜ校長が私を……。面識もないのに。

……よくわからないが、行くしかないか。

コンコン、校長室のドアを叩く。

「一年E組の江藤です。失礼します」

そう言い、中に入り、校長の顔を見たとき、裕希は息をのんだ。

「……きさま……」

「待っていたよ。江藤君」

「いったいどういうことだ。なぜ貴様がここにいる、総頭」

「そう睨むな、ここの校長と親戚でな、急きよ頼まれたんだ。いわゆる、代理だ」

「……、怪我のほうは丈夫なのか」

「おやつ、心配してくれるのですか？　意外だが、嬉しいですね」

「べつに、ただその怪我は私のせいだからな。それだけだ」

誰が貴様の心配などするか。

「それよりも何の用だ」

総頭は、引き出しをあけ、一通の封筒を置いた。

それは、私が出した退学届だった。

「……なんだ」

「貴女に手は出さない」

「何のことだ？」

「……黒木から聞いていないのか？」

「いや……」

黒木のやつ、この分じゃまだ何か隠しているな。

「用はそれだけか。では、失礼する」

裕希が去ろうとしたとき、総頭が言った。

「私の名は、東条院 秀之だ」

裕希も思い出した。

父親の死因を知りたかったのだ。

「……私も聞きたいことがある、父の死因は何だ？」

東条院は答えない。その代わり、一通の封書を出した。

「洋一氏から預かったものだ」

「……」

裕希は封筒を取り、部屋を出た。

三年の教室。

宮内は、裕希が屋上へ行くのを見かけた。このとき、怪我をしているのに気づく。気になり、後を追おうとしたとき、顧問に呼び止められる。

「宮内」

「先生、何です？」

「ああ、江藤裕希って子がいただろ？」

「はい、江藤さんがなにか」

「実はな、退学が取り消しになったんだ」

「……ほんとですか？」

「ああ、それでな、彼女に会ったら部に戻るか聞いといてくれ」

「わかりました」

裕希は、屋上で手紙を読んでいる。

『愛する娘 裕希へ』

この手紙を読んでいるということは、東条院と会ったのだな。ハッキリ言って、どう話したらいいのか私には分からない。東条院から初めてお前のことを聞かされたとき、正直言ってショックだった

よ、同時に悲しかった。けど、お前を責めることは私にはできない。お前を騙していたことにはかわりはない。私は、お前から逃げていた。どう接したらいいのかわからなかったのだ、手紙を書くのも迷った。なぜお前が、暗殺者をしているのか、そうなってしまった理由を知りたい。

ゆつくりと、お前と話がしたい。もう一度、お前をこの腕に抱きしめたい』

「……」

ポタツ…。

涙がこぼれる。

「うつ……」

グシャリ……。手紙握りしめて声を殺して泣いている裕希の姿を、宮内は、声をかけずに去った

屋上にいる裕希の姿を、あるビルの屋上からシリユウが見ている。

「あのカーリーが学生だったとはな、意外だったな」

裕希は視線を感じ、その方向を見る。

数秒、じっと見つめ合うが、シリユウが目を離す。

「……なんだったんだ」

殺気を感じなかったので、気にせずに下に降りる。

「さすがだな、ただの視線でも気づくのか」

と、シリユウは呟いた。

裕希は保健室に行く、黒木に一時ぐらいに包帯を換えるように言われたのだ。

ガチャツ。

「先生、包帯と消毒液下さい」

「んー？　どうかしたのか」

「いえ、医者に時間がきたら換えるよう言われたので」

「そか、ちよっと待ってな」

保健医は椅子から立って、包帯と消毒液を出して裕希に渡した。

「……？」

勝手に私がやっていいのか？

「悪いな、これから行かなきゃならないところがあるんだ、すぐ戻ってくるから留守番頼むな」

「はぁ……」

そう言つて保健医は出ていってしまった。

なんだかな いいのか生徒にまかして、よくわからんやつだ。

まあ、私にとっては都合がいいが。

「…よ、いてて…」

制服を脱ぎ、傷口を消毒する。

「……」

傷を見て

「…無様だな」

と呟いた。

包帯も換え終わつたころ、斎北が入ってきた。

「先輩…どうしたんですか？ 怪我したんですか」

斎北は手を切っていた。

「ああ、先生は」

「今出てます。留守番頼まれたんです。私が手当しますから、ここに座つて下さい」

消毒液があるので、ガーゼと新しい包帯を棚から出す。

「ちよつと深いですね。いったい何したんですか？ とりあえず止血だけしときますね」

「ありがとうございます」

それ以上何も言わない、何か言いたそうなのはわかった。

「なんですか？」

「その怪我、どうしたんだ？」

「…たいしたことありません。心配しないで下さい」

まずいときに会つちやつたね。

「退学取り消しになったんだってな、部のほうはどうするんだ？」

「…まだ、わかりません。すみません」

「あやまることはない」

ガチャッ。

「おや、客が増えてるな、悪い悪い」

保健医が帰ってきた。

保健医は斎北の傷の具合を見て言った。

「こりや医者に行ったほうがいいな。斎北、担任には言っておくから帰っていいぞ。あと江藤もだ、校長が傷に障るから帰るようにと言っていた」

「はい」

よけいなことを…。

いったい何のつもりなんだ。なにを企んでるんだ。

「裕希ちゃん、今の校長と知り合いなのか？」

ほら、面倒なことになったではないか。

「まあ」

不本意だが、怪しまれると困るからな。

それより、

「先生は校長先生のところに行っていたんですか？」

「ああ、今月の報告書を渡してきたんだ」

この男信用できないな、なぜ私のことを知っている。名のつていないのに、私のカルテはないはずだ。

アイツの犬か…？

そうか、あたり前か。あいつは裏国の総頭だったな。

「じゃ、裕希ちゃん、一緒に帰ろうぜ」

「はい」

黒木のところに行ってみるか。

「先輩、ヘルプに行くんでここでいいです」

「そうか？ 一人で平気か」

！。

「平気ですよ。意外と心配性ですね、斎北先輩は」

クスクスクス。

ほんとに、そんなことを言うのは、知らないとはいえ、黒木と貴方たちだけです。まったく。

「人による」

「……！」

プッ。

「あははははっ！」

「なにがおかしいんだ？」

「くすっ いえ。やっぱり似たもの同士だなあと思ひまして」

「誰と誰が」

「齋北先輩と宮内部長」

「健悟と？ なんだ」

「同じこと言うんですから」

「……あっ……」

クスクス。

「人のこと言えませんか。先輩？」

「気を付けて帰れよ、じゃあな」

「はい、ありがとうございます」

齋北は、少し赤ら顔で病院に向かって行った。

くすくす。まいったなあ、どんどん違う顔が見えてきちゃって、突き放そうにも突き放せないじゃないか。

「……まいったな」

キィー。

「いらっしやいませー」

店員の声が響く。

「お席のほうは」

「カウンターに行きますので」

「はい」

まだ三時頃なので客はいるが、仕事のことじゃないので気にしない。

カウンターに座る。

直接黒木に注文する。制服なので酒は飲まない。

コト、グラスを置く。

「どうしたんですか？　こんなに早く」

「東条院に無理やり帰らせられたんだ」

「え？　どういうことですか」

「こつちが聞きたいよ、奴は、親戚の代理だと言っているがな、まあ、これはホントだろうな。黒木は何も聞いていないのか」

「いえ何も。どういふつもりなのでしょう」

「さあね、それより…戻らなくていいのか？」

「…戻れと言われるまで戻る気はありません」

「…そうか」

裕希は分かっていた、東条院は黒木を放さないと、このことは黒木には言わない。黒木もわかっているだろう。

店がクラブに変わる時間がきたので、帰ることにする。しばらく仕事はしない。

「じゃあね」

店を出る。

このとき宮内と合う。どうやらバイトの日だったようだ。

今日は運が悪いな。

「今晚は部長。これからバイトですか？」

「ああ」

「頑張つて下さい。じゃ、失礼します」
軽く言葉を交わして去る。

店に入った宮内は、黒木に言った。

「今の子と、お知りあいなんですか？」

「ああ、君の後輩なんだって？」

「はい。可愛い後輩です。でも、最近元気がないのが気になるんで

すが、店長は何か聞いてませんか？」

「いや」

「そうですか」

「……………」

黒木は、裕希をこのままあの高校においておくのは危ないかもしれないと思っていた。

家に入ろうとした裕希は、またあの視線を感じた。

「……………」

この間は気にしなかったが、二度も感じるということは、明らかに私をつけている。殺気は同じく感じないのだが。

ハッキリと断定できないが、何となくわかった。黒木には知らせない。

早朝、東条院のところに行く。

「東条院っ。私のことは本当に誰も知らないのか」

東条院は、いきなり入ってきた裕希に驚くが、椅子に座る。

「そうだが。なにかあったのか？」

「昨日からつけられている、殺気はないが」

「黒木には言ったのか？」

「いや」

「なぜだ」

「言う必要もないだろう、これは私の問題だ」

「ならばなぜ私に言いに来た」

「勘違いしてもらっては困る。お前達のほうが要素が多いからだ」

「ふむ、断言しよう、私はそんな命令を出してはいない」

「…そうか」

こいつの目は、嘘を言っていない。とすると誰だ？

考え込んでいると、東条院が言った。

「調べるか？」

「…いや、そんな必要はない、無用だ。待っていれば向こうから仕

掛けてくる。それを待つ」

「無茶はするな」

「…なぜ私にこだわる」

「君を失うわけにはいかなと言ったはずだ。それと、洋一氏から君のことを頼まれているからな」

父さんが…。

裕希は驚きを隠せない。

「変に誤解しないでほしい、洋一氏に頼まれたから生かしているのではない、私が君を気に入れたからだ。バカバカしい話だろ？」

フツと、裕希は笑い、

「だな」

と言った。

そして

「依頼をしたのが、裏国の者だったら知らせるよ」

そう言って出て行った。

屋上に行く。

「…足を洗うつもりだったけど、しばらくは無理そうだ」
ハッ…。

「江藤さん」

不意に、誰かに声をかけられる。

振り返ると、この間部室に来て映画がどうのと言っていた人だ。
「なにか？」

「実は君にも出て欲しいんだ、この映画に」
はあ？

「あの、私、部は辞めたんですけど」

「そんなの関係ない」

「でも、困ります」

そう言っているのにもかかわらず、先輩は、無理矢理台本を裕希に押しつけ、

「ヨロシク」

「……」
と言って、行ってしまった。

裕希は呆気にとられて言葉が出ない。

「……なんなのいったい」

なんて無責任なヤツだ。

「……！」

視線。またあの視線だ。

視線の先を見る。

……頭にきた……。

「いい加減にしないか、かかってくるならさっさとかかってこい」と、思わず言ってしまった。

いかんいかん、ここは学校だ。

「しかし、困ったな」

裕希は下に降りた。

ビルから見ていたシリユウ

「お言葉に甘えて、かからせてもらっ」

授業中、誰かが何だあれと言った。

最初、裕希は気にしなかったが、皆が騒ぎ始めたので外を見る。

「なんて書いてあるんだ？」

「K・I・L・L、by D G：なにこれ」

「……」

K I I L、b y D G……。殺す、D Gより。D R、ドラゴン。ドラゴン＝シリユウ。私と同じ暗殺者だ。コードネームはシリユウだがドラゴンが正式の名だ、このことを知っている者はいない。私がなぜ知っているのか？

邪の道はへびってね。

しかし、噂は本当のようだな。予告を出すというのは。

「変わってるわ」

「ホンとよね、何だと思う？ 裕希」

「えっ？ ああ、何だろね」

まず、思わず声に出してしまった。

「……………」

第5章・シリユウ・

放課後、帰ろうとしたとき、昼間の先輩に見つかってしまい、連れて行かれる。

「あの、どこへ行くんですか？ 困ります」

「まあまあ、すぐ終わるから」

そう言っただけで連れて来られた場所は、裏庭だった。

そこには、斎北がいた。

「斎北先輩っ」

「よう、裕希ちゃんも頼まれたのか？」

「頼まれたんじゃない、無理矢理連れて来られたんです！」「ほんとに何とかして。」

「まっまつ。とりあえずここ読んでみて」

「まあ……。それどころじゃないのに。」

「そっついても台本を読んでもみると、」

「……あ、の……これ、もしかして」

「どう？ いいだろ？ アサシンの話した」

「カンベンしてよ……」

「……あやさんのほうが似合ってると思うんですけど」

「いいや、あや子だとだね、君のイメージにぴったりなんだ、頼むよ」

「……………」

「フー。どうして、こうもタイミングが悪いんだ。まいったな。」

仕方なしに返事をしようとしたとき、保健医が来た。

「西岡、それ、少し待ってやってほしいんだ」

「先生、どうしてですか」

保健医は、ちらつと裕希を見る。裕希は横を向く。

「江藤は怪我をしているんだ。良くなるまで待ってくれないか？」

「おれもそうしてもらいたい。ダメか？」

斎北が言った。

西岡は少し考え

「わかった、いいですよ。ただし四日だけです。こっちも期限があるんで」

そう言つて西岡は、帰つていった。

「悪いな裕希ちゃん、あいつちちよつと強引だけど悪い奴じゃないから」

斎北がすまなそうに言った。

「……いいですよ、気にしてませんから。それより、傷のほうは大丈夫なんですか？」

「ああ、8針縫つた」

「うわっ」

そつえば、一度も縫つたことないな。

「ほら、斎北部活だろ」

「あ、じゃあな裕希ちゃん」

「はい」

斎北の姿が見えなくなった。

「……よくここがわかりましたね、先生」

「ああ、私も帰るところだったんだ、そしたら、君が連れていかれるのを見たんでな」

「そうですか」

よく言つ、見張つていたんだろつが、東条院に頼まれたんだな。

まったく余計なことを、私が誰だか、忘れてるようだな。

「途中まで一緒に帰るか」

「いいですよ」

「先生はうちの学校長いんですか？」

「んー、二年位かな。江藤はもう慣れたか」

「まだ一ヶ月位ですからねえ、まあまあつてところですか」

必要以上に、馴れ合う気はないからね。

「斎北と知り合いなのか？ ずいぶんと親しげだったけど」

「部活の先輩です。私、部はやめたんですけど、いろいろかまってくれるんです…」

「人は見かけによらないからな、あいつらは人気はあるが、近寄りたいてみてみんな言ってる。実際はどうだ？」

「良い人達ですよ。ちよつと心配性ですけどね」

ふつと笑う。

「良い顔だ」

「え？」

「良い顔だつて言っただ。あいつらの話ししてるときの君の顔」
保健医はニツと笑う。

「……………」

気づかなかった…裕希は愕然とする。

そんな顔をしていたのか…、自分でも気づかぬうちに。

「どうかしたのか？」

黙り込んでしまった裕希に、保健医が話しかける。

「…いえ、ちよつと驚いただけです。そんなこと言われたの初めてなので」

「そうか、あつ、じゃあここでな。気をつけて帰れよ」

「はい」

…不覚、気づかなかったとはいえ、よりにもよってアイツの手のものに見られるとは。

やっぱり、離れるべきだな。

「総頭」

「榊か」

「はい」

「どうだ様子は」

「はい、これといって…」

「なんだ？」

「本当にあの子なんでしょうか、噂とは少し」

「どうやら、総頭と話をしている人物は保健医のようだ。名を榊と
いうらしい。」

裕希と別れたあと、報告しに来たようだ。

「噂ほどあてにならないものはない。意外な一面を見たのか？」

「はあ ああいう顔をするとは思ってもいませんでしたので、私が
言ったら、本人も自覚していなかったようだ。あれではまるで」

「まるで普通の高校生か？」

「はい」

「油断はするな、なぜカーリーと呼ばれていると思う。最初、名前
はなかったんだ、自然とそう呼ばれるようになったんだ。この意味
はわかるな？」

「はい」

「まあ、今回の争いで嫌でもわかるがな、敵に回したくない人物だ」
「……」

総頭にここまで言わせるとは、本当の姿を見たい

家に戻った裕希は、いつでも出られるように仕事用の服に着替え
る。

いつ仕掛けてくるのか見当がつかない。シリウのデータはまっ
たくないからな。

「さて、どうするか」

たしか、組織の人間だったよな。名簿に乗っているはず、組織の
端末に侵入してみるか。

裕希は、二階にあるパソコンのところに行く。

銃は脇にしまっている。

カタカタ…。

『コードネーム・シリウの記録を示せ』

『・・・うまくいくか』

ピピッカタカタカ...

『特殊コードX。ネーム・シリユウ。仕事に関するデータは、本人の希望により入力されていない』

「……おやおや、シリユウにも信用されていないようだな。当たり前か、こんなにも簡単に情報が見れるのだから」

仕方ないな、写真でもいいから一度見てみなければ、顔を見れば大概どんな奴かわかる。

ピンポーン。

午後七時。

インターホンが鳴った。

「……」

誰だろこんな時間についていてもまだ七時だけど。下に降りる。

「はい、どちら様ですか？」

「私、あや子よ」

あや子さん？

スコープから除くと、本当だ、あやさんが立っていた。ガチャ。

扉を開ける。

「あや子さん。どうしたんですか？ 何かあったんですか？」

「ううん、夕飯に誘いに来たのだけど、どこか行くところだった？」

「いえ別に大 丈夫ですけど」

「ほんと？ よかった」

「あ、じゃあ、ちょっと待っててください」

裕希は二階に上がり、パソコンからフロッピーを取り出し、ほかに必要なフロッピーも取り出して、バックに入れた。

まっ、念のためね。

「じゃ、行きましようか」

行く先は『HELP』。

今は夜だからクラブになっている。

それにしても、これからHELPに行くことが多くなりそうだな
と、思う裕希だった。

アクセス場所を変えようか…。

「カウンターにしましょうか」

「いいですよ」

行ってみると、宮内部長がいた。もちろん黒木も。

「やあ裕希ちゃん、いらっしやい」

「今晚は。今日バイトだったんですね」

「ああ。何にする？ 何でもいいよ」

「裕希ちゃん、お酒大丈夫？」

「はい、平気です」

聞くだけ野暮だ。

「じゃあ私は、マスターのおすすめ。裕希ちゃんは？」

「いつ」

「ん？なに」

「色々あるなあ、って」

危ない危ない。ついいつもの癖で、いつものって言うてしまつと
ころだった。

「このカクテルはどう？」

と、黒木が言った。

それは、いつものカクテルだった。

「…それにします」

ニツコリして言った。

黒木に丁寧語を使ったの初めてだ。これからは、使う機会が多
くなるだろうな、と思う裕希だった。

飲みながら話をする。

「…裕希ちゃん、部活はどうするの？」

「……まだ わかりません」

「そう」

本当は、戻るつもりはない。学校もやめるつもりだ。

今回の争いが終わったら、何もかも精算するつもりなのだ。

郊外の高校にするか、それとも海外へ行くか迷っている。東条院が何と言おうと、学校はやめる。

黒木に言おうか言うまいか、まだわからない。

それに…、父の死因を調べなければならぬ。教えてはくれないからね。

考え込んでいると、映画の話になっていた。

「ほんとに、アイツには参ったよな」

「いつもいきなりなんだもの。裕希ちゃんも災難よね」

「ほんとですよ、ちゃんと断ったのに、あや子さん代わってくださいよ」

今はそれどころじゃないのに。

「うーん、でも、いい記念だからやってみたら？」

「そうだよ、やってごらん」

「…記念で すか…」

「そうそう」

うーん…。

「そ…うですね、いい記念になりますね」

これが終わったら、辞めるつもりだったけど、まあ、いつか。

「あつ、そうだ。できたらテープもらえますかね」

内容的には違うけど、私がしてきたことの証拠として、残していききたい。

「ああ、くれると思うよ、言っておくよ」

「お願いします」

「どういふ映画なんです」

今まで黙って聞いていた黒木が、口を開いた。

裕希はニツと笑って、

「アサシンの話」

と、言ったら

「おやおや、合ってるんじゃないですか」

黒木は表情変えず言った。

クスッ。クスクスクス。

裕希と黒木が笑う。

「ちよつと小腹が空いたわね」

「じゃ、何か作ろう」

そう言つて宮内は裏に行つた。

「私も手伝うわ。マスターいいかしら」

「かまいませんよ」

あや子も裏へ行つた。

黒木と二人になった。

裕希は、カクテルを飲み干した。

「お代りくれる？ それと、御代は私につけといて、勝手に下ろしていいわ。だからあなたのおごりと言つておいて」

「わかりました」

裕希の前にカクテルを置く。

裕希は、そのカクテルを見つめて言つた。

「…あなたに話がある…」

「何です？」

「いや…。おりをみて話す」

カクテルを飲む。

「お待たせー」

あや子たちが来た。サラダとチャーハンを作ってきた。

「いただきます」

それから数時間話し続けた。

午後十一時をまわつた。

「本当にいいんですか？」

「いいですよ。今日は私のおごりです」

「ごちそうさまです。裕希ちゃん送るわ」

「大丈夫です。あや子さんのほうこそ一人じゃ危ないですよ、遠い

いんですから、私が送ります」
「そお？　ありがとう」

あや子を送ったあと、家に電話をかける。もちろん、誰もいるはずがない。

プルルル・プルルル・プルルル…

「……」

おかしい。

留守電が切れている…。

やはり。

フロッピィを持ってきて

「…正解…か」

家に戻った裕希、一見、異常のないように見えるが、裕希には分かった。

パソコンへ向かう。

コンセントははめられている。

シリウが来た。

パソコンにはフロッピィが入れてあった。

電源を入れ、リセットを押す。

ピピッ…ピ。

でてきたのは……

何やら、暗号文めいたものが出てきた。

「……」

解くか解かないか…。解かないことにした。
どこにも異常ないか確かめて眠りについた。
午前一時をまわっていた。

数日が過ぎ、映画の撮影が始まった。

傷もすっかり良くなった。

四日間、シリウは何もしてこなかった。

「じゃあ始めよう」

中庭での撮影。ここでは、アサシンが狙われるシーンだ。ここでの最初のシーンは何者かに狙われるという設定だ。そして、犯人を見附けて、その雇い主を殺すという話だ。

本当に、今の私と同じだね。これだけ似てると西岡さん、あなたを疑ってしまいますよ。

本番になって、裕希の横にある枝が折れた。

裕希が振り向く。

少しの沈黙。

「カートツ！」

西岡のオーケイが出る。

「良い表情だったよ」

「そうですか」

しかし、今のは本当の表情だ。

枝の折れるタイミングはバッチリだった。

…消音銃

枝は本当に折れる折れ方だった。

「……」

シリウの腕は確かみたいだな。

どうやら、この映画のシナリオ通りになるのかもしれない。

昨夜、一つだけなくなっていたものがあつた、それは、この映画の台本だった。

次は、先輩たちのシーンなので、しばらく見物。

「面白いことをしているな」

頭上で声がした。

振り向かなくてもわかった。東条院だ。

「つれないな。よく引き受けたな。下手をすればバレるだろ」

「ただの気まぐれだ。それに、昨夜この台本が盗まれた。意味が分かるか？」

「なるほど」

「丁度いい舞台になった。この映画とともに終わらせる」　フツと笑って言った。

「いいのか」

と、東条院が問う。

裕希は少し黙って、

「いいさ、その時は私が消えればいいことだ」

「…そうだな」

「ああ、そうそう。校医の名は何という？　私の監視役をするのはいいが余計な真似はするなと言っておけ」

「貴女の本気の姿を、見たそうな顔だったな」

「本気ねえ。さあどうかな」

そう言って去ろうとした。

「黒木には言わないのか？」

東条院の問いかけに裕希は、足を止め、

「…いずれ話す」

と、言って去った。

「貴女を、死なせるわけにはいかないですよ」

裕希の去る後ろ姿を見つめながら、東条院が言った。

「それじゃ、斎北と江藤さんのシーンいくよ」

アサシンであるのに斎北を好きになってしまう。斎北もアサシンを好きになってしまい、斎北が告白するシーンだ。

「…先輩のお気持ちは嬉しいです。でも、すいません。私には応えることができません」

「そうか、いきなり悪かったね…じゃあ、友達でいてくれるかな。だめか？」

「…いいえ、友達なら」

「ありがとう、それじゃあ」

斎北が去っていく。

その後ろ姿を、悲しげに見つめながら、ポツリ…。

「ありがとうございます」

と、呟いた。

たしかこのあと撃たれるんだったよな。

実際、本当に撃ってくるだろうか、イヤ、撃ってこないだろう、奴も一樣プロだ。少なくともまともな頭のはずだ。

思った通り、撃ってこなかった。

今度は、裕希一人でパソコンを打っているところだ。

探偵部のパソコンを使う。

「江藤さん、これ打って」

そう言われて渡された紙には、パスワードが記入されていた。それを見た裕希は驚いた。

なぜなら、B・Bのパスワードだったからだ。

「これ何ですか？」

と聞く。

「ああ適当に書いたやつ、それ打ったあと適当に打ってて」

「はい……」

適当……。だったら何も適当に打って言えば済むことだろうに偶然とは恐いものだな。

しかし、これを打つわけにはいかない。

侵入して、一番バレやすいのは学校なのだ。

東条院がこの学校にいることは、側近だけが知っていることだろう。

……校長室に侵入する。

カタカタカタ……

『撮影でB・Bに侵入することになったが、どうすると、打った。』

すると、

『パスワードを変えて打て』と返事が返ってきた。やっぱりね。

仕方ないな、自分のところにアクセスするか。

ピーッ

何かが反応した。

出てきたデータは………！

「………」

父親のデータだった。

どういうこと？父さんに関するデータは、持っていないはず。

ハッ！

まさか

シリウが置いていったフロツピー。

次々とデータが出てくる。そして、ある一文字を見たとき、思わずスイッチを切ってしまった。見るのが、知るのが怖かったのかもしれない。

「カット！」

西岡の声で、我にかえった。

「どうしたの？」

「あ、すいません。つながってしまったので、ビックリして、まさかだったですか？」

「や大丈夫、バッチリだよ」

「よかった」

「今日の撮影はこれで終わりだから、江藤さん帰っていいよ。ご苦労さま」

「はい」

「あつ、そうだ。健悟から聞いたよ、オーケーだよ、出来上がったテープあげるよ」

「ありがとうございます。それじゃ失礼します」

「ああ、バイバイ」

パターン……。

あのととき……。

あのととき出てきた一文字 それは、『死』だった。

「……………」

私は、父の死因が知りたいと思っている反面、知りたくないと思
っているかもしれない……。

第6章・死因・

撮影が終わって、家に帰る途中、誰かにつけられているのに気づく。

気配の主がわからない。

何でもかんでも、シリユウの所為にするわけにもいかない。

それに、筋書きではここでシリユウは出てこない。

「……………」

角を曲がり待ちぶせをした。

すると、向こうも角を曲がらず裕希と同じ行動をとった。

っ！

こいつ 頭の回る奴だ…。しかし、私には今武器がない。

「…何者だ」

「自己紹介をしておこうと…」

そう言った瞬間、

バ！

「…！」

…裕希の喉元に光るナイフ。

「思いましてね」

ニツコリして、その者は顔を出した。

「…ずいぶんな挨拶だね」

ナイフをあてられても裕希は微動だにしない。

「俺はシリユウ、よろしく」

「ああ、アンタがあのだぞけた予告を出した本人か」

「俺も、あんたが学生だったとは思わなかったよ」

「…無駄だと思うが、お前を雇ったのは誰だ」

「さあな、…そうだな、一つ言うなら、『復習』だな
なに…。」

「復讐だと？」

「……流石だな、ナイフを突きつけられても微動だにしないのは、まっ、そうでなきゃ、この仕事はやってらんないからな」

「いずれ、お前には礼をせねばならんな」

「礼？」

そすシリユウが聞き返すが、裕希は応えない。代わりに、

「去ね」

と、言った。

シリユウは、ナイフをしまい、

「シーン20が楽しみだ」

と言って去った。

「……………」

シーン20？

シーン20は、何だっただろう。

家に帰った裕希は、シーン20について、斎北に電話した。

「すいません先輩、突然電話して」

「いや、かまわないよ。どうしたんだ？」

「実は映画のシーン20って、何でしたっけ」

「シーン20？」

「はい。台本を無くしてしまいました」

「ちよつと待ってな……」

何やらゴソゴソとペラペラめくる音が聞こえる。

「20は、殺し屋と争う場面になってるぞ」

「そうですか、わかりました。ありがとうございました」

「いや」

「それじゃ、失礼します」

「ああ、また学校でな」

ガチャ……。

電話を切った。

……、殺し屋と争う、か。

そつえば、殺し屋は、誰だか書いていないな。

『…楽しみだ…』

あの言葉

「……まさか……な」

椅子に腰かける。

私の正体は誰も知らないはず。東条院達を抜かしては。

シリユウに依頼した人物。

「…西岡に聞いてみるか」

明朝、西岡のところに行く。

「そういえば言ってなかったね。叔父の知り合いなんだけどさ、以前この映画のシナリオを叔父に見せたところ、えらく気に入ってくれてさ、それで知り合いの竜さんを紹介してくれたんだ」

「そうですか、どうもありがとうございます」

竜さんねえ…。

よくやるよ。

でも、これでシリユウを雇った人物がわかった。

先生が友達に聞けば、西岡の叔父が誰だかわかるか。

…しかし、どう言えば。

「…しょうがない、調べるしかないか。しかし何で調べよう」
普通人を調べるのには……。

「……………」

くう　　つ。

こうやって考えていてもらちがあかないっ。

仕方ない、不本意だが、奴に聞こう。

そう言っつて、裕希が向かった先は、

バンツ！

「校長っ」

そっ、東条院のいる校長室。

いきなり入ってきた裕希に驚きもせず、

「何だね、こんな早朝から」

と、言った。

「普通人を調べるのにはどうすればいい」

「普通人？　いったい誰を調べるんだ？」

「……雇った人物がわかった。だが、名前がわからない」
「雇われたのは誰なんだ」

「……」

どうする　こいつに言うか…、だが

黙り込む裕希

そんな、裕希の心を察したのか、

「こんなことで、貴女に恩を売るつもりはない」
と言った。

フウ。

「そうだったな、雇われたのはシリユウだ。そして、雇ったのは二年E組、西岡敦の叔父だ」

「シリユウだと？」

「ああ。ふざけた奴つだがな」

「会ったのか」

「好きで会ったわけじゃない。向こうから来たんだ。それより、方法は」

「ああ、P・Bにアクセスするといい」

「P・B？」

聞いたことがない。そんなものがあるのか。

「貴女が知らないのは当然だ、これは…と、説明するより試した方が早い。アクセスコードは、2 B 1 / X X ・ P ・ B だ」

「…わかった」

ボタン。

校長室から出る。

「…水野さんのパソコンを借りるか」

- 探偵部

カタカタカタ。

東条院から教えてもらった、コードを打つ。

ピー-ピピピッ。

『捜している人物名を入力してください』

と、出てきた。

カタカタカタ。

西岡敦といれる。

しばらくして、データが出てきた。

「これは」

なるほど、いわゆる戸籍か。

こんなものまで持っているとはね。

「……………」

西岡敦の叔父は：、一人か。

名は、北村英夫。

こんな人物、私は知らない。しかし、シリユウを雇ったのはこいつだろう。

『…復讐』

…父さんと何の関係が…。

ふと、なぜかそう頭に浮かんだ。

シリユウが置いていったあのフロッピー。

もしかしたら、あれに何か載っているのかもしれない。この間は、動揺して読まなかったから。

私としたことが、情けない。

カタカタカタ。

自分のパソコンにアクセスする。

ピピッ。

反応した。父さんのデータが出てきた。

「……………」

『江藤洋一。二十年前裏国に入国。入ってすぐに幹部の位置に就く、

その前に妻・小夜子と結婚。小夜子は、洋一が裏国の者だとは知らない。四年後、娘・裕希が生まれる。裕希十一才のとき、小夜子が病死。幹部だった洋一は側近に位が上がる。側近は一人だったが別に候補がいた。名は北村英夫、側近になったのは洋一だった。総頭と洋一は以前からの知り合いだった。裏国に率いれたのも総頭だ。妻、娘のことと総頭は知っていた。裕希十三才のとき総頭から娘がアサシンだということを知らされる』

「……」

十三才……。三年前。

そんな前から、父さんは知っていたの。

そういえば、父さんが帰ってこなくなったのは 三年前からだ……。カタ……。

続きを見る。

すると、『パスワード』と出てきた。

裕希は、『Y・E』と打った。

なぜそう打ったのかわからない、ただなんとなくそう思ったのだ。当たっていた。

出てきたのは父さんの死因だった。

『1991年。三月、江藤洋一死亡。死因、射殺』

「！」

な、に……。

射殺……。射殺だっ！

バンッ！

机を叩き立ちあがる。

「なんで、父さんがっ、どうしてっ！」

叫ばずにはいられなかった。

なぜ父さんが殺されなければいけないの。いったい誰が。

「……なぜ、シリウが知っているんだ……」

ブチッ。

パソコンのスイッチを消して、裕希は屋上に駆け上がった。

そして。

ヒュー、パーンッ！

迷いなく、信号弾を上げた。

学校は早退する。

今の裕希には、父親のことしか頭になかった。

家に戻ると、門の前にシリユウがいた。

裕希はついて来いと、家の中へ促した。
ボタン。

「シリユウ、どこでこのデータを手に入れた」

家の中に入るそうそう、裕希は言った。

「俺をその辺のアサシンと一緒にするな」
どうだか。

「それは悪い。だがなぜ調べた」

裕希のそんな言葉に。

シリユウは、少し怪訝な顔をした。

「何を言っている？ 仕事の前に調べるのは当たり前だろう」
こいつ気でも狂ったか？

調べるのは基本中の基本だぞ。

裕希の顔が怒りの顔に変わる。

「キサマが……、キサマが殺したのかっ」

「依頼を受けたからな。どんな依頼だろうと俺は受ける。アンタだ
ってそうだろう」

裕希は、一歩後ろに下がり。

手をギュッと握りしめた。

「お前を買い被りすぎていたようだ。お前が組織の人間だったこ
とを忘れていた」

と言った。

「何が言いたい？」

シリユウの問に、裕希は答えない。

応えるつもりもなかった。

「用は済んだ、帰るがいい」

キツイ眼差しで裕希は言った。

「……………」

ガチャ

パタン…。

シリユウは何も言わず去った。

「……………」

…トン…ズルルル。

壁にもたれかかる。

…ぽた…。

……………」

「だめだな…父さんのことになると感情的になってしまう…」

天井を仰ぐ。

涙が止まらない…。

「父さん…」

『…どんな仕事でも…、アンタだってそうだろう』

「……………」

シリユウ、お前とは決着をつける。

だがその前に、北村英夫、私はお前を許さないっ！

午後一時半過ぎ。

私服に着替えた裕希は、東条院のところへ学校に向かった。

懐に銃を忍ばせて。

チラチラと、私服で歩いている裕希を生徒達が見ている。

目立つのは当たり前だ、私服は禁止されているからだ。

裕希は気にしなかった。先輩達に見られてもかまわなかった。今は授業中だけ。

「裕希ちゃん」

歩いていると名を呼ばれた。

振り向かなくてもわかった。久しぶりに聞く声だった。

「水野先輩」

水野は手を振りながら近づいてくる。

「どうしたの？ 私服なんか着て」

「校長先生に用があつて…。先輩こそ、今授業中ですよ」

「うん。ちょっと職員室に行つてたんだ」

「そうですか」

「なんか、話すの久しぶりだね。撮影のときはすれ違いばかりだったからね」

「そうですね。斎北先輩とは会つてますけどね」

「あや子が言つてた。貢が裕希ちゃんを一人占めしてるってね」

「……！」

くすくすくす。

「一人占めだなんて、あや子さんったら」

「それだけ、みんな好きなんだよ」

「！…先輩？」

「この間、あや子が言つてたんだ。君の様子がおかしいって」

「…どうしてですか？」

水野先輩はちよつと躊躇つて、

「ヘルプに食事に行ったとき、何か、真剣な顔をしてマスターと話してたつて。マスターと君が知り合いなのは健悟から聞いて知つていたけど」

「まずいな、あのとき見られてたのか。」

私と黒木が知り合いだというのも、以前、宮内部長とすれ違ったときだな。

困つたな。

バレルのも、時間の問題かもしれない。

「…たいしたことじゃないんですけど、心配してくれてありがとう」

「ごきます。さつ、先輩、早く教室に戻らないと」

「うん。元気出して裕希ちゃん。じゃ、また」

「はい」

水野先輩の姿が見えなくなった。

…もし先輩達が、私の正体を知ってしまったらどんな顔をするだろう。

私が消えれば済むことだとしても、その時のあの人たちの顔を見るのが怖い。

怖い…、こんな風に思うようになってしまったのも、あの人たちの所為だな…。

「…やはり…部活など入るべきではなかった」

コンコン。

校長室のドアを叩く。

「どうぞ」

ガチャ…。

東条院は椅子に座っていた。

入ってきたのが裕希とわかって、普段の東条院になった。

一体何が、普段なのかはわからないが。

警戒心が無くなったとも言おうか。

「私服など着てどうしたんだ。そういえば、信号弾を打ったのは貴女か？ いきなりどうしたんだ」

「ちよつとね。それより聞きたいことがある」

「何だね」

「父の死因は何だ」

「………、いきなりどうしたんだ」

「いいから応えろ」

「何かあったのか？」

「応えない気か。
っ。」

「なんでも無い。邪魔したな」

ガチャッ。ボタンっ。

校長室から出る。

「……」

裕希が出ていったドアを東条院はじつと見つめる。

あんな格好してあんなことを聞かれたら、何かあったと言っているようなものだ。

雇った主がわかったようだな。

しかし、どうしてまた父親の死因など…。

私が応えないと知っていて…。

西岡敦の叔父だったな…。

「調べてみるか」

東条院は横にあるパソコンに向かい、P・Bのコードを打った。

西岡敦と打ち。

出てきたデータを見た東条院の表情が怖張った。

「北村英夫、だと」

裕希が向かっている場所は、保健室。

東条院が応えないのなら、アイツ、榊に伝えさせるまでだっ。
ガラッ！

保健室のドアを勢いよく開けた。

いきなり開けられて、榊はビツクリしている。

「なんだ、江藤か。ビツクリした」

「聞きたいことがある」

カチッ。

そう言っつて、ドアの鍵を閉めた。

「ん？何だ？ それより、西岡が探してたぞ」

「ああ、もう出られないと言っておいて下さい」

「なぜ？」

「出られないと言ったら出られないんだ、それより私の質問に答え

る」

「江藤、先生に向かつてなんだその口の利き方は、それに」

「芝居はよせ」

榊が言い終わる前に、裕希が遮った。

榊が怪訝な顔をする。

「芝居？」

「そう、東条院秀之の側近、榊衛」

机に腰かけながら裕希が言った。

「何を言っているんだ。側近だって？　なんだそれ」

フウ…

裕希は溜息をつく。

「もうバレてるんだよ、東条院から聞いていないのか。まっ、聞いてても、シラを切るつもりだったんだろうけど、それでもシラを切れるかな」

チャッ。

そう言って、懷から出した銃を榊に向けた。

「…！」

「こついうのはあまり好きじゃないが、さあ、洗いざらい吐いてもらおうか」

「…何が知りたい」

一瞬、気が乱れた榊だが、すぐに冷静さを取り戻していた。

「さすがアイツの側近だけのことはある。と、裕希は、フツ、と笑う。」

「…江藤洋一の死因だ」

「江藤様の？」

江藤様…か。

「そうだ、死因はわかっている。なぜ殺されたのか、その原因が知りたい」

「…江藤様は、当初の頃から側近を務めていた。ある時期、ある人物の捜査をするようにと、総頭から命令された」

「ある人物？」

「北村英夫という人物だ」

「で、その男は何をしたんだ」

「裏国内部にある噂が流れていた」

噂？

「北村は、当時幹部の一人だったんだが、横領をしてるといふ噂だ。その時北村は、総頭にやっていないと言った。だんだんと噂は消えていった。だが、総頭は知っていたんだ。でも、確たる証拠が無かった。そこで、江藤様に内密に調べよと言った。そして、調べていくうちに北村の企みが明らかになった」

「どんな？」

「横領だけじゃなかった。北村は裏組織の連中と手を組み裏国を乗っ取るうとしていた。さっき、江藤様はずっと側近に務めていたと言ったが、ちょうどその頃、総頭の代が替わるころだった、総頭が替われば側近も替わる。北村も側近候補だった。だが、そのことは東条院様に伝わっていた。当然北村は落ちた。そして、江藤様が側近に就いた。東条院様と江藤様は、古くからの親友だそうだ。しばらくして北村は追放された」

「……なるほど、北村は、自分の企みが失敗したのは、江藤洋一の所為だと、しかし、殺そうにも自分は裏国には入れない、そこで、アサシンを雇い、江藤洋一が一人になるのを待って…殺した」

「そうだ」

「……」

馬鹿な奴の逆恨みで父さんは死んだ。

北村英夫という男の所為で…。

スッ。

裕希は、銃をしまった。

それを見た榊は、

「なぜ、江藤様のことを」と聞いた。

裕希は、じつと、榊の顔を見た。

「……そう……だな、素直に教えてくれた礼に言おうか」
一呼吸おいて、

「江藤洋一は、私の父親だ」

「……！」

悲しげに笑って裕希は言った。

「……」

榊は驚きを隠せない。

「最後の質問だ、北村英夫はどこにいる」

第7章・復讐かそれとも・

榊と裕希が話している頃、東条院は黒木と話していた。

「そつちに、裕希は行っていないか」

「いきなりどうしたんです？ 総頭」

「お前、裕希に父親のことは言っていないか？」

「言っわけありません…何か、あつたんですね」

裕希さんの身に。

「実はな…」

そう言つて東条院はすべてを話した。

「……じゃあ、裕希さんは…」

「ああ、多分そうだろう、なんらかの形で父親のことを知つたんだ。多分裕希は、榊のところに行つて原因を聞き出すだろう。銃で脅してな」

「でも……」

「おそらく、北村のところに行く前に、お前のところに行くと思ううから、私が行くまで引き止めておけ」

「わかりました」

保健室。

榊はまだ混乱していた。

コンコン。

ガチャ。

入ってきたのは、

「総頭」

「その様子だと、やはり来たな」

「はい。あの 江藤様がカーリーの父親というのは」

…話したのか…。

「そのことは後で話す。黒木の所へ行く、車を用意しろ」
「はい」

いったん家に戻った裕希。
午後三時。

「……」
北村の家は、ここからだいぶ遠い。
途中までバイクで行くか。
念のため、予備の弾を持っていくか。
黒木のところに行ってから行くか。
仕事の前にお酒を一口飲んでいくのが、唯一の癖だった。
それが仇となることなど、このときの裕希には想像もつかない。

ヘルプに着くと、客はいない。
まだこの時間だと、いつもなら客はいるのに。変だな。
カウンターには、ちゃんと黒木がいた。
裕希に気付いた黒木。

「…こんにちは、今日はどうしたんですか。仕事は入っていません
よ」

「…ちょっとね。それより、客がないじゃないか」

「はい。今日はもう閉めたんです」

閉めた？ 珍しいな。

「なぜ？」

と、聞く。

「ちよつと、用事ができたんです」

「そう、でもちよつどいい、話があるんだ」

「…シリュウのことですか？」

「…っ」

ハッとする裕希。

黒木の目をじつと見て

「…誰に聞いた…」
と聞く。

しかし、黒木は応えない。

「……………東条院から電話があつたのだな。それで店を閉めたのか、まあ、いずれ話す気だったから別に構わないが、…用というのは東条院に会いに行くのだろうか？」

そう言つて、裕希は去ろうとする。

「いいえ、貴女を引き止めておくよう、言われました」
裕希の足が止まる。

「……………」

図られた！

裕希はそう思った。

東条院は調べたのだ。シリユウの雇い主を。

北村のことを知った。

私が北村を殺すと思ったのだ。

私が黒木のところに寄つていくことを知っていた。だから黒木に連絡して私を北村のところに行かせないために…。

ダッ。

裕希は入口に走り出した。

「裕希さんっ！」

黒木が追う。

カンカンカンッ。

階段を駆け上がり、外に出たとき、

ハッ！

東条院の車が見えた。

「ちっ…」

バイクに乗っている時間はない。

裕希はそのまま走り出した。

「総頭っ！ カーリーが」

榊が叫ぶ。

「わかつている。榊、お前は学校に戻れ。連絡があるまで動くな」

「わかりました」

ガチャッ。

車から出て、榊は学校へ戻っていった。

車は、黒木の前で止まる。

「乗れ」

車は黒木を乗せ走り出した。

「総頭、すいません」

黒木が言った。

「……洋一に、もう一つ頼まれたことがある」

「江藤様に？ 何です」

「仇を取らせないでくれ、とな」

「……自分のために、手を汚させたくなかったんですね」

「……」

『本当なのか、嘘じゃないのか？ 秀之』

『残念だが、本当だ』

『裕希が……アサシンなんて。俺は、どうしたらいいんだ。一体、どうして、アサシンなんて』

『理由は、本人に聞くしかないだろうな。何か深い事情があるのだろう』

『……もし、私が裏国の人間だと知ったら……、あの子は……どんな顔をするだろう』

『洋一』

ハアハア。

東条院達を撒くために、路地裏や狭い道を走っていく。

「……総頭、申し訳ありません。見失ってしまいました」

「……仕方ない。黒木、お前は店に戻れ」

「わかりました。総頭はいかがいたします?」

「裕希の家に行く」

東条院達を撒いた裕希は、ビルの屋上にいた。

学校にも店にも、家にもいられない…。そして、北村のところにも行けない。

東条院は北村の暗殺を阻止するだろう。既に手をまわしているはずだ。

「……」

これからどうするか…。行くところがないとなると 新しい隠れ家を探すとしても、裏のルートでは買えないだろうから、表か、買えるだろうかこの歳で、だが奴のことだ調べあげるかもしれない。どうする…。

「……………」

…あのマンションに行ってみるか。

以前まで、隠れ家として使っていたマンションに。

もう、奴の手がまわっていたら諦めよう。

-と、その前に、変装していかないと。

裕希は、美容院とブティックに行く。

だが、不運は重なるもの、行った美容院に斎北がいたのだ。

「いらっしやいませー」

店員の息の揃った声。

女性店員が裕希に近づいて、

「初めての方ですか?」

と、聞いた。

「はい」

「どういった髪型にしたいか、お決まりですか?」

「特には、ただ、今と全然違う髪型にしたいんですが」

そう言ったら、店員はニッコリして、

「かしこまりました、今、担当の者を付けますのでこちらの席でお

待ち下さい」

と言つて、奥に行つた。

ちゃんとした店だな。

そう広くはないが、だからこそキチつとしているのか。

別に、担当者を付けてくれなくてもいいんだけど、ここに来るのは最初で最後だから。

あれこれ考えていると、担当らしき人が来た。

その人の顔を見たとき、裕希の顔が恐張つた。

「よう、いらつしゃい裕希ちゃん」

「…せん、ぱい」

「びつくりした？ このバイトしてるんだ。けど、裕希ちゃん家
つてここから遠いよな」

「…たまには」

「そうか、確か今と違う髪だよな、具体的には？」

「…肩まで切つて、前髪からサイドにかけてシャギーを、そのあと
ストレートパーマをかけて下さい」

「シャギーが目立たなくなるけどいいのか？」

「ええ、かまいません」

「わかつた。でももつたいないな、伸ばしてたんだろ」

「そういうわけじゃないです、ただ、切る暇がなかっただけです」

本当は…、仕事に行くため変装するのに便利だったから。

髪は武器の一つだ。

ジャキツ、ジャキツ。

肩より少し下めで、一気に切る。

それからシャキシヤキと、軽やかに切られていく。

出来上がるまで、裕希は目をつぶっていることにした。

…なんで、こんなときに先輩と逢うんだろうか、一人になりたい
と思つているときに。

まるで誰かに仕組まれたみたいだよ。いや、仕組まれたんじゃない
いむしろ、そう、誰かに踊らされている、そんな感じだ。ここまで

思い通りにならないとそう考えてしまう。

…こんな状況がずっと続くと、きつと私はどうにかなってしまう。気持ちが不安定になってしまう。だが、今動くわけにはいけない、日本を発つわけにはいけない、父さんの仇を取らなければ。シリウもいる……。

……クソッ！ 今にもどうにかなりそうだよっ！

裕希は思わず、髪を切っていることも忘れて、下を向いてしまった。

「おわっ。いきなりどうしたんだ」

斎北のびっくりした声が飛んできた。

ハッ！

裕希は我に返った。

「ア…すいません」

「いや、大丈夫だよ。カットは終わってるから」

「そうですか、良かった」

「じゃ、タイマーが終わるまで、ちょっと我慢してな」

「はい」

斎北は、他の人のところに行った。

「……………」

…ハア…。

まずった、すっかり忘れて考えこんでしまった。

やっぱり、父さんのことは禁句だな。

私が私でなくなってしまう。

別なことを考えよう。

私が映画に出ないことは、先輩たちはアイツから聞いただろうか。斎北先輩は何も言っではこない。こんな、無責任なことをしたんだ、いくら人の良い先輩たちでも、許すはずがない。

…クス。

それとも、呆れられてしまったかな。もしそうなら、…ちょっと悲しいな。

まあ、自分でまいた種だから、仕方ないけど。

ピコンピコンピコン…。

タイマーが切れた音だ。

カチッ、

「はい、お疲れさん。シャンプーするから」

「はい」

シャンプー台に移動する。

シャー…。

「熱くない？」

「大丈夫です」

ブワァー

髪を乾かしながら整える。

仕上げはムース。

「…こんなんで、どう？ 前髪少し軽くしてみたけど」

「…バッチリです」

「だいぶというより、全然イメージ変わったな」

そうじゃなければ意味がないんですよ。

よし。

「ありがとうございます」

「いや。また来てな」

お金を払い店を出る。

途中、化粧と着替えをするのにデイスコに入る。目立たなくて済むからね。

服装は、チャイナ風のロングドレスに、丈の短いジャケット。

化粧もプロ並みに。

…さて…、行きますか。

「……」

見張りは、いない…。

正面からではなくて、裏から入る。

壁があるがそんなもの飛び越えればいい。

最上階に行き、部屋に入る。それでも気は抜けない。

トサリッ。

ベッドに腰を下ろす。

フウ…。

「…どうするか…」

ここも長くいられない。

…早く済まさなければ。二、三日中に…。

「……………」

パソコンの前に座る。

しばし考える。

カチッ。

パソコンのスイッチを入れる。

「……北村は後回しだ。まずはシリユウをかたずける」

信号弾はあげられないが、奴の組織コードにメッセージを入れる

ことはできる。

メッセージは。

『五丁目、廃屋のビルにて待つ』

名は出さない。奴ならわかるはず。

「さて…、一眠りするか」

ピロロロ、ピロロロ。

裕希の家にいる東条院の携帯電話が鳴った。

「…私だ」

『黒木です。その後、裕希さんからは…』

「いや。ここには来ていない。柵に学校を張らせているが来ていな

いようだ」

『そうですか、私のところにも来ていません』

「……………あそこはどうだ」

『あそこ？』

「隠れ家に使っていた部屋だ。あそこは誰も張らせていない」

『総頭……』

「勘違いするなよ。私がそこまで良い人だと思うか？」

『そう、でしたね。行きますか？』

「ああ、頼む」

午前一時。

「……」

約二時間くらい寝たな。

それじゃ、行くな。

服装は……

「……いつか、これで……念のためズボン穿いてくか、やっぱり」

脇に銃をしまい、足にはナイフを。

サングラスを掛けて。

「行きますか」

バイクで行きたかったけど、黒木の店に置きっぱなしだから仕方ない、そう遠くないから歩いて行くか。

新しいバイク買わなくちゃな。

裕希が出ていった数分後、黒木が来た。

ガチャガチャ……

鍵が掛かっている。

いったん一階に戻り、鍵を借りる。

「すみません。712号室の鍵を貸して下さい」

「あなたは？」

「兄です」

鍵を借りて、部屋に入る。

人の気配は、もちろんない。

ベッドを触る。これは、裕希が来たか確かめるためだ。

「……」

微かだが、暖かい…。

総頭の言う通り、裕希さんはここに来た。

しかし、いったい何処へ…私が来ることなど知らないは。ここに長くいられないことはわかってるだろうけど。

…何か、手掛かりはないだろうか。

…パソコン…。

『なんらかの形で、父親のことを…』

このパソコンには、フロッピーは入っていない。とすると、

黒木は受話器を取り、総頭にかけた。

プルルル、プルルル。ガチャ。

「黒木です。総頭のおっしゃった通り来てたようです。それから裕希さんのパソコンに入ってるフロッピーに、おそらくそこに父親のことが、…はい、私の感ですが、…わかりました、こことどまります」

東条院は二階にあるパソコンの部屋に行く。

「…これか」

起動させ、中身を見る。

データが出てきた。それを黙ってみている東条院。

そして、パスワード。

「パスワード、裕希はわかったようだな」

さて、どうしたものか。と、考えるが、悩む必要はない、それよこの機械がある。

懷からその機械をだすと、パソコンにつなげ、作動させる。

ピー、カタ、カタカタカタ。

ピピッ。

パスワードが解け、死因のデータ出てきた。

それを見た東条院は、

「ふざけたまねを」

と、言った。

誰れがこのフロッピーを…。

……！

『…台本が盗まれた』

アイツ、シリュウか。

第8章・決闘と正体・

午前一時三十五分。

指定した場所に行く。

「……………」

失敗するわけにはいかない。北村を殺るまでは死ねない。

奴の実力はだいたいわかっていて、実戦しているところを見たことはないから、ハッキリとしたことはわからないが

多少の怪我は覚悟しておこう。

「ずいぶん待ったぞ、カーリー」

頭上から声が響いた。

振り仰ぐと、屋上にシリユウが立っていた。

「待たせたねっ。始めようかつ」

ダッ！

懷から銃を取り出しながら走り出す。

銃を消音にする。

中は真っ暗だ。サングラスをはずす。

夜目が効くのは私だけではない。

周りを見渡す。

何もない。柱だけ。

「……………隠れる場所は無しか……………」

耳を澄ます。

…ジャリ……………」

小さい…砂利を踏む音がする。

そっ、あちこちに砂利があるのだ。

「……………」

ダッ。

二階に向かって一気に走り出す。

ザッ。タンタンタンッ。

階段を駆け上がったとき、
パーンッ！ ビシッ

「……！」

サッ…。

…アイツ、音消してないのかっ。

…しかし同じ階にいるのなら、微量の気配で探せる。
バツ。

パスッパスッバスッ。

発砲しながら距離を縮めて行く。
ザザッ。

柱の陰に隠れる。

「……」

少し長引くな…。

アイツは本気を出していない。

…フッ。私もだが、上等じゃないか。

裕希の家にいる東条院は黒木に連絡している。

「シリユウのコードの中に何か入ってないか。外部からのメッセージだ」

『わかりました。お待ちください』

カタカタカタ。

データを引き出している。

『…ありました。五丁目の廃屋ビルにて待つ、と』

「それだけか」

『はい』

「時間は」

『一時六分です』

「わかった」

プッ…。

黒木から連絡があつたのが午前一時過ぎ、今午前二時。約一時間前か。

五丁目廃屋。

向かおうとして、玄関を出たとき、

「校長先生？」

「……！」

門のところにあや子が立っていた。

「君は？」

「名倉あや子です。裕希さんとは部が一緒でした」

「どうしたんだね。こんな真夜中に女の子が一人危ないではないか」

「裕希さんの様子が変なので、それで、部活もいきなりやめると、それで気になって、あの、裕希さんは」

「実は、帰ってきていないんだ。私も今まで待っていたんだが」

「そう ですか。…校長先生は裕希さんとは」

「父親と友人なんだ」

「…わかりました。こんな時間にすいませんでした。それであの、もし帰ってきたら伝えてください、みんな心配してると」

「…分かった。伝えておく」

ぺこり。

あや子は、お辞儀をして帰っていった。

東条院は急いで廃屋ビルに向かった。

ハア…。

あちこち傷だらけだ。

…カーリー。さすがだな、噂以上だ。

足音がしなければ危なかったかもしれない。

しかし、これ以上の持久戦は危険だ。

「………」

シリユウ、なかなかやるじゃないか。

裕希も傷だらけだ。

ここまで手こずるなんて初めてだ。

しかし…チャラ…、

残りの弾を取り出す。

残り三発か…。

これで決めなければ。

ス…、

ダッ！

シリユウに向かって走り出す。

「……！」

真っ正面から来るとは、…もらった。

パーンッ。

スッ。

寸前のところで避ける。

パーンッ

二発。

バッ！

パスッ。

横に飛びながら撃つ。

ビシッ。

「くっ……」

シリユウの足にあたった。

パーンッ。

三発。

もう片方の足ももらうつ。

バスッ。

「ウッ」

ガクリ…。

シリユウが座り込む。

とどめをさそうと、立ち上がったとき、

「カーリーッ！」

「…っ！」

その声に一瞬隙ができたとき、
パンッ！

「！…っ」

シリユウの放った凶弾が裕希に命中した。

「カーリーッ！」

「…くっ…」

パスッ。

銃弾は肩に命中していたが、何とか打つ力はあった
弾はシリユウの眉間に命中した。シリユウは死んだ。

「……っっ」

ガクンッ。

裕希が倒れる。

「カーリーッ」

東条院が駆け寄る。

裕希を抱き起こす。

「しっかりしろっ」

…しっかり…しろだと、いったい誰のせいで…、

東条院の言葉に、怒りが込み上げてくる。そのせいで意識がハッ
キリした。

「…なぜ…キサマがここにいる」

「喋るな。…運がいいな、あんな至近距離で急所はずれている」

そう言いながら、止血をする。

ギュッ。

「っっ…。運 だって、そんなもの、あれが奴の実力なのだ」

いてて、やっぱり、しばらく撃たれてないから免疫がなくなっ
てるな。氣イ失ったほうが楽なんだが、どこに連れていかれるかわ
かったもんじゃない。

しかし…

「喋るなど言っている。今、車を……カーリー？」
「……」

不本意だが、東条院の腕の中で気を失った。
次に目を覚ましたときは、自分の家のベッドの上だった。

「総頭、裕希さんの様子は」

「まだ、目覚めていない」

午前十時三十分。

裕希の家には黒木と東条院が話をしている。あのあと、東条院は黒木に連絡をし、榊たちを解散させた。

「なぜ裕希さんは、いきなりこんなことをしたのでしょうか」

「仇、だな。父親を殺した」

「仇？ フン。そんなんじゃないよ」

二人の会話に、突然裕希の声が割り込んだ。

「裕希さんっ」

「目が覚めたのか。気分はどうだ」

「いいと思うか？」

そう言いながら、キッチンへ向かう。コーヒーを煎れる。
それを見た黒木が、

「傷が塞がっていないんです。そんな濃いものを飲んで」
と言った。

だが、裕希は気にしない。

コーヒーを手に、椅子に座ると言った。

「言っておくが、父親の仇だからといってアイツを殺したんじゃないよ。私は売られた喧嘩は買う主義なんでね」

コーヒーを一口飲む。

「では、仇は討たないというんだな」

シン…。

コーヒーを置く。

「……なぜ私にかまう。頼まれたほかに何かあるのか？ 必要以上

に関わる何かが。言ってもらおうか」

そう言って向けた目は、裕希ではなく、カーリーの目そのものだった。

その目を見た東条院は、

「…わかった、実は、君の父親から自分の仇を取らせないでくれと頼まれたんだ」

「それですと、黒木に見張らせていたわけか」

「そうだ」

「…お前たちが私にかまう理由はわかった。だが、さっき言った通りだ、私は喧嘩を買ったんだ、お前たちにとにかく言われるいわれはない。たまたま父親を殺した奴と重なっただけだ」
ぐい。

コーヒを一気に飲み干す。

「では…、どうしても北村を殺すと？」

「愚問だな」

「………わかった」

カタリ…。

席を立つ。

「黒木、帰るぞ」

そう言って、東条院は出ていった。

「はい…」

黒木は、裕希のほうを見て言った。

そんな黒木に裕希は、

「何だ、わからないのか？ この時点で私とお前たちは切れたのだ。わかったらさっさと帰るんだね」

「………」

キィ…、パタン。

パタン。ブロロロロ…

走り去る車の音。

「…っ…」

ガタンッ。

ギュッ。

いっ…っ…。

左胸を押さえうずくまる。

「……けほ……」

ケホケホ…。

熱…、出てきたかな。

…弾は、急所すれすれのところではずれていた。

「足を撃つてて正解だった…」

けほっ。

…寝よ…。

「ソファーでいいか」

ドサリ。

居間に行つて、ソファーに横たわる。

「……………」

ースウ。

眠りに落ちた。

午後二時過ぎ

あや子・宮内・斎北・水野の四人は、裕希の家に向かっていた。

「裕希ちゃん、帰ってきてるかしら」

「どうか。昨日、貢が裕希ちゃんに会ったのが、夜の七時半位なんだろ？」

「ああ」

「その時、変わった様子はなかったのかい？」

聖が聞いた。聖も、私服で来ていたことが気になっている。

「いや、何か考え込んではいただけだな」

「そう 何か思い詰めていなければいいのだけれど」

話していると、裕希の家に着いた。

ピンポーン、ピンポーン。

インターホンを鳴らす。

ピンポーン…。

「ん…」

…誰…だ…。

ピンポーン。

はいはい。人がせつかく寝ているのに…。

イヤイヤ起き上がり、インターホンを取る。

「はい。どちら様…」

「裕希ちゃん？ 良かった。あや子よ」

「……！」

あや子、さん…？

「裕希ちゃん？ みんなも来てるのよ」

み・ん・な…？

「…ちよつと待っててください」

がちや。

インターホンを置くと、二階にあがった。

まったく。

「ホントにタイミング悪いなっ」

いいかげん腹が立ってきた。

黒のシャツに着替えて降りる。

カチャリ。

玄関の扉を開ける。

「散らかってますけど。どうぞ入って下さい」

あや子たちを中に入れる。

「今お茶煎れますね。座っててください」

「ああ」

カチャ。

コーヒーをおく。

裕希は、椅子をもってきて座ると、話を切り出した。

「どうしたんです四人そろって、珍しいですね」

「裕希ちゃん、何か…悩み事でもあるの？」

あや子が言った。

「いいえ、無いですけど」

「本当に？」

「はい」

「ならいいのだけど。実は私、裕希ちゃんが心配で昨日の夜来たのでも、裕希ちゃんはいないって言われて」

っ！ 言われて？

「誰かいたんですか？」

「ええ、校長先生がいたわ。なんでも先生も裕希ちゃんを待ってたって、裕希ちゃんのお父さんの親友なんですって？」

「はい」

東条院が家に、中に入っていたな 何もいじってないだろうな。

あとで確かめよう。

「…裕希ちゃん」

今度は、宮内がしゃべり出した。

まっ、予想はつく。

「はい」

「映画のことだけど、どうしていきなりやめるなんて言ったんだい。しかも、自分ではなく榊先生に頼むなんて。理由を聞かせてくれなにか」

「俺も聞きたい」

齋北が言った。

…理由、どう言おうか

この際、本当のことを言った方が、スッキリするかな。本当はまっずいんだが、まっ、どのみち言わなかったとしても、ここを離れるんだ、かまわんか。

「榊先生とは、ちよっとした知り合いなんで頼んだんですよ、実はちよっと今手を放せない仕事がありまして、それに、あの映画はま

ずいんです」

「仕事？ バイトかなにか」

「いえ。学生は副業で、そっちが本業なんです」
怪訝な顔をする四人。

「どんな仕事？」

水野が言った。

「アサシン」

「え？」

「アサシンなんて聞こえはいいけど、簡単に言えば、ようは殺し屋なんです私」

プツ。

あははははは。

「……………」

いきなり笑いだす四人。

フウ。

信じてないな。

裕希は溜息をつく。

まあ、いいけど。べつに。

「わかったよ、そこまで言いたくない理由なら、無理に聞かない」
宮内が言った。

「はあ……………」

「でも、思ったより元気そうなんでよかったよ」
そう言って、席を立った。

「帰るんですか」

「ああ、例の如く、依頼が待ってるんでね」
「そうですか、頑張ってください」

四人を、玄関まで送る。

「それじゃあ」

「はい」

三人出て行って、斎北が振り向いた。

「なにか」

「本当なのか」

「……信じてくれるんですか？」

「……どっちが、本当の君なんだ。あの時泣いた涙は、本当だよな」

「……、ああそうだ、西岡さんに言っと思ってください、あのとき私に渡したパスワード、偶然とはいえ、あれは危険ですからと」

裕希は、笑って言った。

「……わかった。じゃあな」

斎北たちは帰って行った。

「……」

クラッ。

ーッ！

ガタンッ。

「……」

いて、肘ぶつけた。

だいぶきてるな。今までの疲れが一気に出たか。熱もだいぶ上がってるみたいだ。

しかし、今ここで寝込むわけにはいかない。

解熱剤飲んどくか。

ふらつく体を支えながら、キッチンに行き飲む。

コクコクコク。

ハァー。

これで熱はひくだろう。

カタ……。

椅子に腰かける。

「……」

言ったら楽になった。

笑い飛ばされてしまったけど、斎北さんは、信じてくれたみたいだけど、べつに、信じてもらわなくてもいいけど。

……どっちが本当の、か……

「どっちも、私なんだけどな……」
目をつぶると、眠りに落ちていった。

第9章・別れ

- 裏国総本部

東条院の部屋。

「総頭、ほんとに裕希さんと切るおつもりですか」

「……………」

東条院は応えない。

「江藤様との約束は、どうなするつもりですか」

「…………… 洋一との約束は守る」

「では」

「ただし、生活費の工面だけだ」

「え。それでは、仇をという約束は」

「彼女も言っただであらう、今回のことは仇ではないと」

「しかし」

「黒木、情を入れすぎだぞ。少し頭を冷やせ」

「…………… わかりました」

黒木は部屋から出ていく。

「……………」

総頭のおっしゃることはよくわかる。だが、裕希さんにもしものことがあつたら、約束は守れないんですよ。そのことは貴方もわかつているはずです。総頭。

裕希さんは、死ぬことなんて何とも思っていないんです。むしろ…、死にたがっているんです。今までは江藤様が、父親が生きると信じていたから生きていたんです。ですが、父親がいない今は。

だからこそ、我々が歯止めにならないといけないはず。

「総頭、そうではないのですか？」

…まだ、何か隠してらっしゃいますね。

裕希さんの傷の具合が気になりますので見に行きます。

途中、櫛とすれ違う。

コンコン。

櫛が扉をノックする。

『誰だ』

『私です』

『入れ』

プシュウッ。

東条院が言ったと同時に、扉が開いた。

『失礼します』

『…北村の様子は』

『今のところ変わった様子はありません』

『北村から目を離すな。シリユウが殺されたことを知るはずだ。奴もそう馬鹿ではない、次に殺されるのは誰かわかるはずだ』

『わかりました。随時、報告いたします。失礼します』

プシュウ。

櫛は部屋から出て行った。

東条院は、椅子に座ったまま窓側に向きを変えた。

『……』

洋一…、これで良かったのか…

『……洋一、なぜ本人に理由を聞かない？ 家に帰っていないそうではないか』

『秀之、俺は怖いんだよ』

『怖い？』

『ああ、あの子の顔を見るのが怖い。自分がアサシンだと、父親に知られたとわかったら、あの子はきっと、私の前から姿を消してしまう。それが怖いんだ』

『洋一』

『…秀之、頼みがあるんだ』
『なんだ』

『もし、俺の身に何かあったら、あの子を頼む。仇だけは討たせな
いでくれ』

『わかった』

『ありがとう。あともう一つ俺の我が儘を聞いてくれ』

『なんだ？』

『なぜアサシンなどになったのか、アサシンになる者達の理由を
知っているだけに、わからないんだ。私は：あの子を死なせたくな
い…。秀之、あの子を死なせないでくれ。でも、あの子のしたいよ
うにさせてくれ』

「…洋一」

お前が死んでから、まだ一カ月しか経っていないんだな。
まるで何年も前のことに思える。

洋一。

「このままでは娘は死んでしまうぞ」

東条院は空を仰ぎ洋一に言った。

黒木は裕希の家に来ている。

ピンポン、ピンポン…。

「……」

さつきから何度も押しているが、返事がない。

出かけたのか……？

いや、あの傷で出かけられるわけがない。

あの人のことだ、出るのが面倒なのかもしれない。

そう思い黒木は、玄関まで行く。

ノックをする前にドアノブを一応引いてみた。すると、

「…っ！」

カチャ…。

扉が開いた。

「……」

そうつと中へ入っていく。

「……裕希さん？」

リビングにはいないので、キッチンの方へ行くと、テーブルの上に伏せている、裕希の姿が目に入る。

近くにより様子を見る。

裕希は、ぴくりとも動かない。

スウー、スー……

熟睡しているようだ。人が入ってきたことに気づかぬほど。まあ、不穏な気配じゃないからというのもあるが。

そつと裕希の額に触る。

……熱が。少し高い。

「ここじゃ良くないな」

下がるのも下がらない。

……カタン。

黒木は、そつと裕希を抱き上げ、二階へ運んだ。

裕希をベッドに寝かしたあと、下へ降りる。すると、リビングのテーブルの上にコーヒークップが五つ置いてあった。

誰か来たのか、五つのうち一つは裕希さんのだろう。あの人はまたコーヒーを飲んだのか、あとの四つは 四にあてはまるものは、ああ、あの探偵部の人たちか。

あの人達とはどう決着をつけるのだろうか、あとで聞いてみよう。

黒木が来てから二時間後。

午後七時半過ぎ。

フツと、裕希は目を覚ました。

「……………」

ここは、自分の部屋：か。
自分の……。

「……………」

ガバツ。

飛び起きる。

自分の部屋だっけ？

たしかキッチンで眠ってしまったはずだ。

誰かがここまで運んだ？

「……………」

考えられるのは一人、こんなことをする奴はアイツしかいないだろう。まったく。

そっと、ベッドから降りる。

薬が効いたのか、熱はほとんど下がった。

パソコンのほうへ行く。

東条院が来ていた…

何もしていないだろうけど、一応大事なやつは持っているが。そう思いながら周りを見る。

すると、何かが無いのに気づく。

「……………」、シリウが置いていったフロッピーが無い…」

見たのか？…、東条院はあれを見たんだ。パスワードの部分も。そして持ち帰った。

フウ…。

「コピーでも取っとくんだっけな」

さて、アイツの顔を拝みに下に降りるか。

トントントントントン…。

リビングに行くと、そいつがいた。

そいつは、銃の手入れをしていた。

ハァー。

ため息をつく。

「黒木、何をしているんだ。そんなもんリビングでやらんでくれ、しかも人の物まで」

「裕希さん、熱はどうです？」

裕希の言ったことなど全然気にしてない様子。

「ああ…ほとんど下がったよ、薬飲んだからね」

「それは良かった」

黒木は、少し笑って言ったあと、また、手入れし始める。
呆れて見る裕希は、額に手をあて言った。

「黒木、なぜ戻ってきた。お前たちとは切ったと言ったであろう」
黒木は手を止めた。

「…総頭は、貴女を死なせない、仇は取らせないとっておきながら、貴女と手を切った。その理由がわからないんです。なぜ今になつて」

「そんなの簡単なことだ。父さんとの約束を、あれほどまでに守る奴だ。だったら答えは一つ、最後にもう一つ、頼まれたことがあるんだろ」

「どんな…」

「さてな、まあ、大体予想つくけどね」

「……」

黒木は黙ってしまった。

裕希は黒木に冷たく言う。

「悩む必要はない、貴方には関係の無いこと。早く帰るんだね、店も、休んでられないだろう」

言い終わると同時に、二階に着替えに行く。

今度は、ちゃんと調べてから行かなければ、面が割れているからまた変装しないと。

このチャイナドレスは、血でダメになったから何を着るかな。

クローゼットの中を覗く。

うーん。

ああそうだ。バイクを買わなきゃならないから、やはりパンツルックだな。

そうすると、ジーパンか。まともな格好でバイクは目立つからな。黒のジーパンに、黒のＴシャツ・ジージャンでいいな。この格好していけばいいだろ、ちょうど胸の包帯も絞めるし。

着替え終わり、偽造カメラ（これはウォークマンを改造したもの）

を出す。

ナイフは靴に仕込んであるからいいとして、銃はどうするかな、左肩は無理だし 右肩に掛けるか。

銃を右脇にしまう。

髪は濡れた感じにする。

サングラスをかけ、下に降りる。

黒木は…、いた。

玄関に立っていた。

「出るんだったら出て」

「一つだけ、聞いてもいいですか」

「……なに？」

靴を履きながら応える。

「あの人たち、探偵部の人たちはどうするんです？」

「ああ、そのことなら平気」

ガチャッ。

玄関から出る。

カチッ。

鍵を閉める。

歩きながら話す。

「平気？」

「ああ。バラした」

「……！」

黒木はギョツとする。

信じられない顔をする。

裕希はクスッと笑った。

「信じてないみたいだったけど。なんたつて、笑い飛ばされてしまったからな」

笑っている裕希を見て黒木は、

「なぜ平気でいられるんです。もしかしたら信じてない振りかもしれないんですよ」

と言った。

「……いや、あれは本当に信じてない。ああでも、一人だけいたな」
「誰です？」

「斎北さんだ。どっちが本当の私なんだと言われたよ、信じる信じないは関係ないんだ、言っても言わなくても、どっちにしろここを離れるんだからな。だったらスッキリしてから行こうと思ってな」

「……どこへ」

「さあね、まだ決めてない。さて、これで本当のお別れだ、二度と家に来るんじゃないよ、アイツがいい顔しないだろ。それと、アイツにこれ渡しといてくれ」

そう言っ出て出したのは、退学届だった。

「一応出さなければならぬからな。それじゃあね」

黒木に背を向け、歩き出した。

その後ろ姿を見つめ黒木は叫んだ。

「裕希さんっ、死なないでくださいっ！」

。と。

もちろんこの声は、裕希に届いた。

「……さあね」

裕希は、ポツリ、そう呟いた。

黒木は、結希の姿が見えなくなるまでそこにいた。

第10章 - 決着 -

近くのバイクショップで買う。

「いらっしやいませ、どんなものをお求めですか？」

男の店員が聞いてきた。

「うーん、音が静かなのあります？」

「種類は」

「四百」

「え、四百。ですが、お客様には大きすぎるかと」

店員は驚いたように言う。

前のバイク買ったときも言われたな。

「大丈夫。前のもそうだったから」

「そうですか。…では色は」

本当なら赤が好きなんだけど、目立つから、

「黒で」

「かしこまりました。そうしますと、この型がよろしいかと」

そう言つて、パンフレットを見せてくれた。

その中に、前のやつと同じ型の物があつた。

「…この中で、一番動きやすいのは」

「えーと、これですね」

店員が指したのは左から二番目のバイクだった。

良かった、同じ型じゃなくて。

「わかりました。これを下さい。いくらですか」

「ありがとうございます。しばらくお待ち下さい」

店員は奥に行った。

裕希は時計を見る。

- 8時20分か。

このあとアジトに行つて、北村のことを調べあげると夜中になつてしまふな。

奴が一人なら簡単なんだが、そうもいかないだろう、シリユウが死んだことを聞いているはずだ、居所を変えただろう。

実行するのは夜中だ。

しかし、今夜は無理だな、勇み足過ぎると良くないしな。

明日…、だな。

店員が戻ってきた。

「お待たせしました。132万4千円になります。お支払い方法は「カードでお願いします。一括払いでいいです」

店員にカードを渡す。

そんな裕希に、店員は目を丸くする。

あたりまえだ、普通ローンで買うのが一般的で一括払いなんてめったにいない。

店員は、カードを受け取り裕希の横で作業をする。

「……」

不正がないようにか。

ピリピリピリ。

領収書を切る。その領収書と一緒にカードを返す。

「では、必ず口座をお確かめ下さい。ありがとうございました」
バイクに乗り、走り出す。

「ありがとうございましたっ」

アジトに向かう途中、ガソリンを入れる。

確かに、乗り心地はいいな。

午後九時十一分。

アジトに着く。

フー

バイクをおいて、エレベーターに乗ろうとしたとき、管理人さんに呼び止められる。

「ちよっとカリさん」

「はい」

カリという名で借りている。

「昨日の夜、貴女のお兄さんがいらしたわよ」

「えっ」

お兄さん？

「カッコイイお兄さんね」

「はぁ、どうも」

私に兄はいないぞ。きつと黒木だな。

まったく、よくやるよ。

部屋に戻り、とりあえず上着を脱いだ、包帯を取り替える。

傷口を見つめる。

「……」

こんな怪我さえなければ、とつくに奴を殺せたのに。アイツさえ邪魔しなければ、……くそっ。

…フウ。

「どっちにしても明日だな」

奴の居場、自分の足で捜さなきゃ。

ブウォンッ。

翌朝といっても午前十一時半

行動に移す。

「…まさかこの私自ら、聞き込みするとは前代未聞だ」

まっ、最後だから我慢するか。

今日の服装は、黒のスーツに白のチャイナ風のシャツ、そして黒のジャケット、ファスナー式のね。でなきゃ銃が見えてしまうからね。

化粧はしてる、もちろんサングラスも忘れずに。

「すみません。ちょっとお聞きしたいんですけど」
以前住んでいた周辺で聞き込みを開始する。

「なにかしら？」

斜め向かいの住人らしき女の人に聞く。

「そこに住んでた北村さんなんですけど、引っ越ししたんですか？」

「さあ、でもここ最近見ていないわねえ」

おばさんが首を傾げていると、

「美土里町じゃない？」

と、別の人がきた。

「あなた知ってるの？」

「ええ、たしか美土里町にある別荘に行くつて、知り合いらしき人たちが話してるのを、聞いたのよ」

「ずいぶん遠くに行つたのねえ」

美土里町。

「そうですか、ありがとうございます」
「いいええ」

裕希はお辞儀をしてバイクに戻る。

美土里町にいるのか。

美土里町は、ここから十キロぐらい離れた町だ。

別荘とか言つてたな、たぶん登録はしていないんだろう。
登録してあれば一発でバレるからな。

さて、と、奴の居場所もわかったことだし、お昼でも食べに行くか。

ブオン。走り出す。

美土里町まで、一時間ちよつとで行ける。

裕希が昼ご飯を食べているとき、探偵部の四人は、顧問から裕希が退学したことを聞かされていた。

「先生、どういふことなんですか。退学は、取り消しになったんじゃないんですか？」

あや子が言う。

「一度はそうだったんだがな。実は私も良くわからないんだ。校長

が受理したそうなんだが」

「校長先生が？」

「ああ」

「今日は来てますか？」

斎北が聞く。

「あ、ああ、つてこらお前たち、どこに行くっ！」

顧問がしゃべ終わる前に、四人は校長室に向かって走り出していった。

「話聞いてもらえと思うか」

走りながら宮内が聞く。

「無理にでも聞いてもらっさ」

斎北が応える。

校長室前。

コンコン。

ガチャ。

「失礼します」

あや子が一番に入。

つづいて宮内、斎北、水野とつづく。

「何かね。何かあったのかい」

東条院は表情一つ変えずに言った。

「突然申しわけありません。私は三年A組の宮内健悟です」

「C組の斎北貢です」

「F組の水野聖です」

「E組の名倉あや子です」

次々と挨拶をしていく。

そして東条院も、

「私が、校長代理の東条院だ」

宮内が切り出す。

「単刀直入にお聞きします。今更なげ、江藤裕希さんの退学を受理なさったんですか」

「なぜって、君たちに関係あるのかな」

「部の後輩です」

「部は辞めたと聞いたが、違うのか？」

「……いえ、本当です」

「だったら関係ないんじゃないのかな」

東条院の言っていることは当たっている。

「……校長先生は、裕希さんの知り合いなんですよね」

あや子が話し出す。

「そうだか」

「親友の娘が学校を辞めるんですよ、平気なんですか？」

「いくら親友の娘だからとはいえ、本人が望んだことだ。私にはどうすることもできないんだよ」

「だったらせめて、理由を教えてくださいませんか」

「……今頃それを聞くのかね？ 君たちは知っているはずだ、それに本人から聞いているはずだが」

東条院は知っているのだ。裕希が自分の正体を話したことを、黒木から聞いたのだ。

「……え、聞いてません、けど」

あや子が言った。

スイツ……。

斎北が前に出る。

「校長、貴方は知っていたんですか」

「貢？」

あや子が怪訝な顔で言う。

宮内と水野は黙って見ている。

「だとしたら？」

「辞めさせようとは、思わなかったんですか？」

「思わないね。彼女が好きでやっていることだ」

「死んでも？ 平気なんですか」

「えっ。 ちょっと何言ってるの？ 裕希ちゃんが死ぬですって？」

「どういうこと？」

斎北にあや子がつめよる。

「この間、裕希ちゃんが俺たちに言ったことは本当のことだ」

「……！ そんな」

愕然とするあや子。

「……彼女にとつて、君たちは危険な存在だ」

「どういう意味ですか」

「そのままの意味だ」

コンコンツ。

途中、誰かが来た。

ガチャ。

「……あ、お話中でしたか」

「かまわん、この者たちは知っている」

「はい」

入ってきたのは、榊だった。

「榊、先生？」

四人とも、驚いている。

「報告いたします。北村は昨日、美土里町に引越しました。この他に変わった様子はありません」

「家には」

「はい、一歩も出ていないようです」
クツ。

東条院が笑う。

「馬鹿な奴だ。おそらく裕希はもう、居場所を突き止めているだろう」

「おそらくは。あの方なら簡単でしょう」

東条院と榊、二人の会話に茫然と聞いている四人。

「下がっていい」

「失礼いたします」

ガチャ。

パタン。

柊は戻っていった。

「柊は、私の部下なんだよ」

「部下？ いったい貴方は」

「さて、裕希のことだが、彼女のことは忘れてくれないか」

「そんな…」

シクシク…。

あや子が泣いている。

ガチャ…。

宮内がそつと促す。

「俺は、忘れることはできません」

「……………」

「殺し屋が、本当の彼女だとは思いません。何か、理由があるんだと思います」

じつと斎北を見る東条院。

「知りませんか」

「…いや、私も知らない。これは本当だ」

美土里町。

裕希は北村の家の近くの喫茶店にいる。

その喫茶店からは北村の家が見える。

軽い昼食をとりながら、じつと様子を見る。

近所の人の話だと、家にいるようだ。

午後一時をまわったところだ。

カチャン…。

コーヒーを置く。

「……………」

どうするか、夜まで時間がありすぎる。

…事を、早めるか。

とすると、どうやって中に入るか。

「……………」

カタ…。

席を立ち、トイレに行く。

パタン…。

バックから携帯を取り出し、北村の家に向けた。

プ、プルルル・プルルル

ガチャツ。

『もしもし』

男の声。

「私、裏国の者ですが、北村様でいらっしゃいますか？」

『ああ、そうだが何か』

「はい。総頭、東条院様から貴方様にお渡しするよう頼まれたものがございます。近くまで来ているのですが、そちらへお伺いしてもよろしいでしょうか」

『…分かった。鍵は開けとくから勝手に入って、置いていってくれ』

「かしこまりました」

プツ。

電源を切る。

フツ。

裕希が笑う。

馬鹿な奴だ。

頼まれた物などあるわけがない。

あるといえば、鉛玉をくれてやるぐらいだ。

「行くか」

「ありがとうございます」

喫茶店を出て、北村の家に向かった。

北村の家の周りには、木々が茂っている。

ガチャツ。

玄関を開け中に入る。

「失礼いたします」

と言いながら周辺を見渡す。

シンとしているが人の気配はする。

二階…か。

キィ…、パタン。

出た振りをする。と同じに気配を消す。

懷から銃を出しながら、二階へ上がっていく。

ボディガード達はいないらしい、一つの気配しかない。

気配のするほうへ行く。

扉が閉まっている。

息を整えてドアノブに手をあて、そつと開ける。

スー…。

椅子に座っている姿が、目に入った。

銃口を向け、

「…北村英夫だな、こつちを向いてもらおうか」

「！だれ、だ」

電話の声と同じ。

本人か。

「シリユウを知ってるか？」

バツ！

奴が振り向く。

「おまえはっ！」

ビクッ！

銃を向けられていることにビクつく。

「お前え、は、カーリー…」

くす。

「はじめまして、北村英夫さん？」

「どう…して、ここ、が」

声が、震えている。

ニツ…。

そんな奴の姿を見て笑う。

それは余計に恐怖心をかきたたせる。

「た…、助けてくれ。何でもする。命だけは、金ならいくらでもやる。な？」

「……………」

こんな小さい男なのか、こんな男に、父さんは殺されたのか。

裕希の胸の中に、失望感がよぎる。

チキ…。

撃鉄を引く。

「！ まっ、まっってくれっ」

「……………」

こんな奴につ！

グッツ！

引き金を引いた。

「！…っ」

ドタッ…

男が倒れる。

銃弾は、奴の眉間に命中した。

北村は死んだ…。

なんという呆気なさだ…。

その場に立ちつくす裕希。

裕希の中に、ある感情があがっていった。それは、失望感ではなく、無力感に近いものだった。

…ぼた…

涙が頬をつたう。

目を伏せる。

「…まだ、まだ泣くな」

部屋を出、家を出る。

バイクのところへ行く。

携帯電話を出し、東条院の携帯にかける。

その間も涙があふれる。

プルルルル・プルルルル。

ピッ・ピロロロロ・ピロロロロ。

東条院の携帯が鳴る。

「ちよつとすまない」

ピッ。

「はい……誰だ？」

「……私だ」

「！ 裕希っ」

東条院の言葉に斎北がかけ寄る。

『……仕事は済んだ、……後始末は頼んだよ』

「……わかった。今どこにいる」

「………」

「裕希？」

プツッ。

切れる。

プー、プー、プー。

「………」

裕希……

「校長？」

斎北が聞く。

「……切れたよ」

「え……」

「二度と……彼女に会えないかもな」

「そんな」

途中で、電話を切った裕希。

ギュッと、手を握る。

涙が止まらない。

うつ……。

父…さん、父さん、なんで…、なんで私、生きてんのかな…。
「ねえ、なんでかな」

もっ…、生きてる意味、無くなったのに。

…これから…

「…どうしよう…」

この後、裕希は姿を消した。

生きているのか死んでいるのか、それは誰にもわからない…。
ただ、誰もが願っていた、生きていることを。

- - - 2年後 - - -

裏国総本部、東条院の部屋。

「総頭っ」

「なんだ」

「カーリーを見付けたという報告がっ」

「！どこだ」

「アメリカ・ニューヨークですっ！」

·
E
N
D
·

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4484d/>

ASASHIN

2010年10月8日14時49分発行